

辟邪と呪縛

－古墳被葬者≡死者像の2面性に関する手稿－

豊岡卓之

目次

I. はじめに	69
II. 古墳の特殊性と被葬者像	69
III. 前～中期大型前方後円墳の埋葬施設	72
IV. 朱と鏡の呪法	74
V. 副葬された革盾	76
VI. まとめにかえて	85

論文要旨

古墳時代前～中期の前方後円墳に葬られた首長≒死者は、同時代のひとにどのような存在と観念されていたのであろうか。古墳の埋葬施設と副葬品の配置等に対して、辟邪と表現する研究者がある。彼らは被葬者が守護されるべき存在であったと考えていることになるが、その理由を考古学・古代学の手法で付す者は少ない。確かに、古墳時代前～中期の大型前方後円墳は厚葬と表現するのが相応しい埋葬施設・棺を用い、多量の副葬品を伴う。古墳の規模の拡大と副葬品の多量化は、王権の強化に随伴したものと説明されても疑いはいだかないが、木棺から石棺への変化にみるように、被葬者を厳重に密閉することに腐心する葬祭の指向性については、王権強化の反映と評してみても何も説明したことにはならない。

小稿では前～中古墳の要素のなかからいくつかを選んで検証し、大型前方後円墳を核とする葬祭は、生成神的な神格と同一視された亡き首長を地上高く埋葬して顕示すると同時に、被葬者を埋葬施設に呪縛するものであることを指摘した。そして前～中期大型前方後円墳の被葬者、及びそれに倣った葬祭によって古墳に葬られた首長は、神聖なる存在である一方で、邪悪にも変わりうる存在である、いわば2面的な存在として同時代のひとに観念されていたとの仮説を提起した。

豊岡 卓之 (とよおか たくし)
橿原考古学研究所共同研究員

辟邪と呪縛

－古墳被葬者＝死者像の2面性に関する手稿－

豊岡卓之

I. はじめに

古墳前～中期のひとは、古墳被葬者＝死者（の身体）をどのような存在と考えていたのであろうか。

かつて大場磐雄は、「私は古典や民俗資料に、我が國の墓及び祖霊の存在を山上と考えられた点と結び付けて、我が國固有の信仰であると信じたい」という前提のもとで、前期古墳葬祭と被葬者を以下のように特徴づけた。「…実用を超越した器具－特に宗教的色彩の強い－のみが副葬されるというのは…死体に対して特別な観念をもっていたからに相違ない。それは恐怖観念が根本的に存したと思われる。…古くは死体とその靈魂は不離一体と考えた。これを身体魂と呼ぶ。死の原因やそれによって生じる生理的現象等を悪靈（Demon）の所為と考え、死体にはその靈が宿るものとして恐怖し、之を遠ざけ又はその悪靈の脱出を防圧しようとする。…文化が進み、死体と靈魂とが別と考えるようになって死体に対する観念と魂の存在場所とを二様にする事となる。他界観念の意識は後者において濃く現れて来る。…古墳時代前期…はその過渡期の様相…と推察される。即ち身体魂に対する恐怖の念は相当に濃く残っているが、一方死後の世界も考えられ、それは…神々の世界であって、神に献供される意味に於いていろいろな品が捧げられた」とした（大場 1950）。古墳時代研究の大綱形成期の論文であり、日本の伝統的死者観の展開としては先鋭的である。それ故に不明な点もある。大場は、身体魂に対する恐怖の存在根拠と死後の世界を神の世界とする根拠のいずれにも、鏡・剣・玉を中心とする副葬品をあげた。しかし、神への献供に類する副葬品、信仰的色彩の強い副葬品、そして靈魂を融和する献供品の分類基準は示されておらず、副葬品がもつとされた呪力と身体魂・他界観の関係も、考古学・古代史学的手法で立証されているとは

いい難い。大場の主張は、当時の民俗学的成果による考古資料の解釈であった。

現在も古墳の埋葬施設・副葬品に関して辟邪との表現が用いられるが、被葬者が護られるべき存在との立証が付されることの稀なように、古墳時代の死者観をめぐっての考古学・古代学的手法による議論は活発とはいえないう状況である。そうした中で考古学・古代史学的手法を保ちながら、被葬者＝死者に対する同時代のひとの観念を探るためには、古墳の基礎的事項を整理して手がかりとすることが相互理解を形成しやすい。小稿では最初に、墳墓形式としての古墳の特徴を踏まえて、成立期の埴輪祭祀から推定される被葬者＝死者観を粗述する。次に、『古事記』・『日本書紀』（以下、『記』・『紀』と略記）神話をもとにして、飛鳥時代以前に遡る死者観を推定する。この二つの被葬者＝死者観を考古学資料・文献で検証して、古墳前～中期の古墳被葬者＝死者観について考える。その成果のまとめのなかでは、和田晴吾・広瀬和雄・辰己和弘の古墳被葬者観についてもふれておきたい。

II. 古墳の特殊性と被葬者像

1) 墓・墳・塚の字義と古墳

漢字は埋葬の場を墓・墳・塚と表わす。許慎『説文解字』と白川静の研究（白川1984）に従えば、墓は地下に埋葬施設を設けるものである。墳は墓の地表に盛土（封土）を加えたものであり、塚は高墳である。白川は塚の初文を冢とし、犬牲を供えて清めた墳とする。丘は自然の高まりであり、それを利用して造られた墓も指す。

河南省濬県辛村古墓群（西周～春秋）は、商代後期～春秋期の王侯墓のなかで、墓上封土が最も早く確認された例である（郭宝均 1936）。河南省殷墟調査はその成果を受けて、第8次調査（1933年秋）以後は封土の存在を

前提として王陵調査がおこなわれた(石璋如 1964)。後におこなわれた婦好墓調査では、墓壙に封土を重ねて地表に基壇を造り、建物の建てられていたことが確認された(中国社会科学院考古研究所 1980)。「礼記」『檀弓』は、孔子が父母を合葬したときの言葉を「古は墓して墳せず」と伝えるが、先記の成果からは事実ではない。春秋末期になると、河南省固始候古堆1号墓(円形墳・高7m・直径55m)にみるように、封土は既に大規模化していた(河南省文物保護研究所 2004)。

商代後期～前漢の大規模な墳墓は、地下に方形多段墓壙を穿ち、その最下部に直方体を呈する木槨を組んで埋葬空間とした。棺は西周初には既に多重化し(例：河南省鹿邑清宮長子口墓／河南省文物考古研究所 外 2000)、木槨も春秋期には特異な形状のものが造られるようになった。『左氏春秋』成公2年傳は、宋の文公(? - 589BC)の墓では槨に屋根をつけ、柏横の大木で棺を作り、槨と棺の隙間に蛤貝を焼いた石灰を充填したという。戦国晩期の河南省胡庄韓王陵では、屋根形の頂部をもつ槨が実際に検出された(馬俊才 外 2009)。後漢以後は磚室墓等の埋葬空間が主流となるが、埋葬施設を地下に造り地表に封土を築くことには変化がなかった。

吉井秀夫は、朝鮮半島～倭地の墳墓を「墳丘先行型」・「墳丘後行型」に分類した(吉井 2002)。中国中原の「墳」は「墳丘後行型」に相当し、陵寢殿等の基壇である場合が多いのに対して、朝鮮半島の「墳丘後行型」墳は墳丘利用に関する情報がなく、中国中原系墓制・山東半島土墩墓との関係性が検討されるのをまちたい(岡田英弘 1977)。これに対し、古墳前～中期の前方後円墳を核とした古墳は「墳丘先行型」であり、盛土・地山整形によって埋葬施設の基底となる墳丘を高く準備し、墓壙を整え、埋葬施設を築きながら棺を納めて埋葬をおこない、墓壙埋めもどし後には方(円)形壇を築いて埴輪圍繞等で閉塞することを特徴とする。つまり古墳の墳丘は、埋葬施設を築くための基底が主体であり、それを高く造ることに第一義がある(豊岡 2008)。地上高く亡き首長を葬り、後に墓壙上に壇を築いて埴輪列等で閉鎖することからは、古墳には死者埋葬の場以上の意味があると想像される。このように古墳は、「墓・墳・塚」の字義および実態とは合致しない墳墓形式である。

2) 前期前方後円墳被葬者に対する観念

古墳の特徴が、埋葬施設の基底となる墳丘を高く成形し、埋葬施設を築いて死者を埋葬することにあるときに、同墓制が必要とされた理由はどのようなものであろうか。筆者は宮山形特殊器台等を検討して、古墳前期前半の前方後円墳被葬者像を推定したことがあるので要約しておく(豊岡 2003)。

近藤義郎・春成秀爾は特殊器台・壺を供献具とし(近藤・春成 1967)、吉備の部族が神と同一視するに至った首長の葬祭・継承儀礼において、特殊器台・壺による供献儀礼をおこない、新首長に服属を誓ったとした。しかし立坂形特殊器台は島根県西谷墳墓群からも出土し(東森市良 1971)、後に香川県天満・宮西遺跡でも出土した(川畑聰 外 2004)。特殊器台祭祀が服属儀礼であれば、吉備の首長は周辺地域の首長に服属したことになる。地域関係とも矛盾するから、近藤・春成仮説は棄却される。

特殊器台・特殊埴輪は、弥生中期以来の器台に系譜する。佐原眞は器台の役割を評して、器を坐りよく置くことと、高く捧げる意志の具現化にあるとし、弥生中期後葉の器台は後者に重点があるとした(佐原 1976)。器台は広口壺を載せるものであり、広口壺は粉容器の役割があるから、器台は穀物壺≡生成神的神格を高く顕示するものといえる。高橋護は佐原と同様の壺・器台の儀器的性格付けを出発点として、吉備の首長葬祭では特殊器台・壺によって生成神的神格の存在を顕示したなかで、旧首長の靈威を新首長が継承する儀礼がおこなわれたとする仮説を示した(高橋1986)。高橋説によれば、吉備以外の地域で出土する特殊器台は、同地の首長葬祭に吉備の部族がその生成神的神格を伴って参列したことを示し、地域間の親和性を窺わせる重要遺物となる。

オオヤマト古墳群調査は、宮山形特殊器台に新しい視点を加えた。萱生古墳群は西殿塚古墳類型前方後円墳を中心とする古墳群である。そのひとつの中山大塚古墳では、最古期の宮山形特殊器台を葬祭に使用した後に竪穴式石室¹の被覆石材上に破碎廃棄していた(豊岡 1996a)。その後の西殿塚古墳類型造営集団は、宮山形を在地生産するとともに、円筒埴輪・向木見形特殊器台工人をもとに都月形埴輪工人組織を編成して都月形の生産をはじめた。この宮山形・都月形は箸墓古墳等に供給され(豊岡 1996b、徳田・清喜 1999)、それら工人組織の掌握者が

被葬者である西殿塚古墳では、宮山形・都月形・円筒埴輪による圍繞がおこなわれた（福尾正彦 1990）。吉備の首長葬祭の場に生成神的神格を顕示した特殊器台・壺は、奈良盆地東南部で在地生産されて前方後円墳の方（円）形壇を装飾する祭器に変化した。つまり奈良盆地東南部の大型前方後円墳とは、器台・壺系埴輪を樹立し、生成神的神格と同一視された首長が葬られていることを顕示するものであった。

古墳は「墓・墳・塚」の字義とは異なる墳墓形式であり、墳丘も陵寢殿等の基壇となる「墳」とは異なるものであった。前期前方後円墳という墳墓形成が亡き首長を生成神的神格と同一視して葬り祀ることを顕示する立体空間であれば、被葬者≒死者は社会再生産に関わる神聖な存在として、同時代のひとに観念されていたと推定される。同観念を前提とすれば、古墳の埋葬施設・副葬品等のあり方を辟邪と評価することも可能と思われる。

3) 『記・紀』神話の死者に対する観念

『記・紀』神話の死に関係する物語には、神聖さとは異なる死者観がみられる。両神話は死のはじまりをイザナミの死とし、死者の世界を描き、イザナミの呪詛がひとの世に死を広げたとするように、死者には邪悪な面があるとする。イザナミの死の時空は、高橋健自（高橋 1922）・小林行雄（小林 1949）・白石太一郎（白石 1975）の論考から、横穴式石室を舞台として読まれることが多いが、小稿は『紀』神代上第5段一書の葬祭の進行に注目する。

『紀』神代上第5段一書

- ①-1 伊弉諾が伊弉冉の頭辺、脚辺で哭礼する。
- ①-2 伊弉諾が剣で火神を切る。
- ①-3 伊弉諾は伊弉冉を追って黄泉に入るが、伊弉冉は既に滄泉之竈をした。
- ①-4 伊弉諾は櫛に灯りをともして伊弉冉をみる
が、伊弉冉の姿に驚いて逃げ帰る。
- ①-5 伊弉冉は泉津醜女8人（他一書では八色の雷公）に伊弉諾を追わせ、自らも追う。
- ①-6 伊弉諾は泉津平坂を千人所引磐岩で塞ぎ、伊弉冉に絶妻之誓建する。
- ①-7 伊弉諾は装束を脱捨て、後に禊ぎ祓う。

比較に、『魏書』東夷伝倭人条にみる葬祭の流れを略

記しておく。

- ②-1 始死停喪十餘日 當時不食肉
- ②-2 喪主哭泣 他人就歌舞飲酒
- ②-3 已葬 舉家詣水中澡浴埋葬

『記・紀』と『魏書』は、哭礼（①-1⇔②-1）・禊ぎ（①-7⇔②-3）で共通する。火に関する儀礼（①-2）も、岡山県榑築遺跡の被火状態の儀器から（近藤義郎 外 1992）、弥生後期まで遡る可能性がある。死者を納めた空間の閉塞（①-6）は竪穴式石室でも必須であるから、横穴式石室に限定されるものではない。

『紀』編纂時期には『儀礼』が儀礼書としてあった。同書は『養老律令』「学令」でテキストのひとつとされている。『儀礼』「土喪礼篇」は、死者から靈魂を分離して、死体は墓へ埋葬し、靈魂は祖先靈と融合させて、死者を族類と永世に結びつける儀礼を記す。当時の知識人は儒教的葬祭と死者観に関する知識を有していた。その一方で、道教の仙界観も伝えられていた。『懷風藻』「遊吉野」には、「靈仙駕鶴去（靈仙は鶴に駕って去り）、星客乗查返（星客はいかだに乗って返る）」とある。藤原不比等が天皇吉野行幸時の感慨を詠ったものであり、当時の知識人は道教の知識も有していた。

しかし伊弉冉の死の儀礼には、倭地の古俗を引き継ぐ部分があり、儒教的葬祭と道教の影響を指摘するのは難しい。伊弉冉は泉津醜女（または雷公）を使い、生者に害を及ぼそうとする。死者は約束を違えられ静謐を破られると怒りを発し、生者に害を及ぼすという観念が、『紀』編纂の時代にはあった。『紀』のことであるから、近い時代の事象を反映して古い物語が作られたという疑いが残る。『紀』のなかで亡きひととの盟約として想起されるのは、天武天皇紀の天津皇子関連記事である。天武8年5月、吉野宮において天皇・皇后と6人の皇子は、天皇の勅を皇子が相互扶助して守るという誓盟を交わした。天武10年2月に草壁皇子を立太子し、同12年2月に天津皇子が朝政参画。朱鳥元年9月に天武天皇が崩御すると、草壁皇子を中心とした殯宮儀礼が大内陵埋葬まで続く。一方の天津皇子は、朱鳥元年10月に謀反の罪を得て自死。しかし『紀』は謀反の内容を記さず、天津皇子の文武両道に通じて人望を集める性格を記し、賜死の裁断は行き過ぎとの批判を滲ませて天津皇子に同情的である。その点で天武天皇紀執筆者は、死者が怒りを発するとの

観念を古い時代のもので、虚偽との疑いをもつとさえ思われる。したがって大津皇子の死は、伊弉冉の死の物語を暗喩とするものではなく、崩御した天武天皇の怒りによると読み解くことはできない。つまり、伊弉冉の死の儀礼にみる倭地の古俗と共通する部分からは、死者が怒りを発して生者に害を及ぼすとの観念の飛鳥時代以前に遡る可能性が推定される。

4) 古墳被葬者≒死者の2面性

死者が怒りを発するという観念が飛鳥時代をどれほどに遡るものかはいま明らかではないが、古墳時代首長は生成神的な神格と同一視される神聖なる存在である一方で、静謐を破られ約束を違えられと怒りを発して生者に悪しき行為に及ぶ邪悪な存在でもある、という2面性をもつ可能性が考えられた。

池澤優は中国古代～中世の死者観を論じて、祖先・厲鬼の二様の死者観の存在を指摘した(池澤 2003)。池澤によれば、祖先とは子孫が執行する儀礼によって天に由来する力にあずかる死者であり、厲鬼は正常な死に方ではなく、死体が葬られない等の惨めな状態におかれた不吉な存在である。祖先・厲鬼はともに生者に祟りをもたらす存在であるが、祭祀によって天の恩寵にあずかる祖先は生産性に結びつくのに対して、厲鬼は破壊性にのみ結びつく存在であるとする。池澤の指摘する祖先・厲鬼と、埴輪祭祀成立経緯および伊弉冉の死の物語から推定された古代日本の死者に対する2面的な観念とは、死者観の構造として近しく思われる。

中国の死者観・他界観と古代日本のそれとの間には関係性があるのであろうか。藤井康隆は、福岡県博多遺跡群第50次調査第945号住居(古墳前期)・佐賀県柏崎貝塚から出土した觚形ミニチュア鉛器によって、古墳前期の北部九州には既に道教が伝えられていたとする(藤井 2019)。道教関連の遺物を前にしては、古代日本の死者

に対する2面的な観念の形成に、同時代中国の死者観・道教的仙界の影響を否定するのは難しい。ただし肯定的に理解する場合には、受容のあり方に気にかかる点がある。『記・紀』のイザナミの死の儀礼は、『魏書』の倭人の葬祭記事と関係が指摘できるものであり、『紀』編纂時期の葬祭観には古墳初頭のそれを引き継ぐ部分があった。伊弉諾と伊弉冉の永訣のあり様は、『儀礼』「土喪礼篇」にみる死者との離別の主旨と大いに異なる一方で、死した伊弉冉のいく黄泉は地下他界に類するといえなくはない。古代日本の死者に関する儀礼・観念は、このように中国の死者観・他界観と部分的に類似性を示すから、同時代中国の死者観や道教及びその形成に関わる思考(以下、道教的思惟と略記)の倭地での受容が、直接・包括的におこなわれたとするのは難しい。

小稿では、東アジアには類似した死者観が広く分布するなか、漢帝国以後の覇権的拡大にともなって、儒教的死者観や道教的思惟が周辺地域に波及し、時代・社会的位相差によって選択・変形されながら受容されたものと仮定して、以後の章では古墳被葬者≒死者に対する観念に2面性があると仮定することの成否を、古墳前～中期古墳の埋葬施設・副葬品から目をひく要素を取り上げて検証する。なお時期区分は表1を目安とする。

Ⅲ. 前～中期大型前方後円墳の埋葬施設

1) 古墳初頭～中期の埋葬施設概観

古墳初頭～中期の各時期最大規模の前方後円墳では、各種の埋葬施設と棺が用いられた。古墳初頭の埋葬施設には木槨・竪穴式石室(持ち送り壁)があり、割竹形木棺が納められた。古墳前期前半には竪穴式石室(垂直壁・持ち送り壁)があり、割竹形木棺が納められた。古墳前期後半～中期には竪穴式石室(垂直壁)が継続し、組み合わせ石棺⇒長持形石棺が納められた。大型前方後円墳

時期呼称		参考とする土師器・須恵器型式
古墳初頭		古式土師器：纏向2類～纏向4類
古墳前期前半		古式土師器：纏向5類
古墳前期後半		古式土師器：上ノ井手遺跡 S D031～上ノ井手遺跡 SE030上層
古墳中期 前葉	中期前半	古式土師器：船橋 O2、須恵器：TG232～TK73
古墳中期 中葉		須恵器：TK216～TK208
古墳中期 後葉	中期後半	須恵器：TK23・47

表1 時期呼称と時期区分の目安

の副次的埋葬施設や中型前方後円墳の埋葬施設では粘土槨に割竹形木棺・組み合わせ木棺が用いられた。

古墳前期前半の垂直壁をもつ長狭な竪穴式石室は、石囲い木槨・持ち送り壁竪穴式石室の発展形であり、古墳前期後半～中期の長持形石棺を納める竪穴式石室の原形である。そこで桜井茶臼山古墳例によって、古墳前期前半の大規模な竪穴式石室の特徴を整理する。桜井茶臼山古墳は、寺沢薫を代表とする榎原考古学研究所調査によって埋葬施設の全容が明確にされた（寺沢 外 2011）。

後円部中央の風化岩盤に隅丸長方形の墓壇（南北10.7m・東西4.6m・深3m）を穿ち、竪穴式石室を築いた。墓壇の底面中央には、棺床基底となるように南北長6.8m・東西幅1.45mの基台に掘り残し、上面を南北に続く浅いU字形とした。その後の石室構築手順の概略は、以下のようである。

- ①長方形の基台の周囲に板石材を敷き詰め、基台上面に全面朱彩の薄板石材を多重に敷き、基台四周に全面朱彩の薄板石を敷きひろげて、石室壁体の基底とした。
- ②壁体積み上げは3工程でおこなわれた。①の基台を覆う全面朱彩の薄板石上に棺床土をおき、木棺身を納めた後に、高さ0.4mの第1工程を築いた。内壁となる石材は、続く第2工程でも同様に内面側約25cmを朱彩した。最終の第3工程では、再び全面朱彩した大型板石材が用いられた。
- ③壁体完成後に、全面朱彩した12枚の天井石を懸架し、ベンガラを混和した粘土で上面・周囲を密封した。
- ④墓壇を埋戻して方形壇を築き、板石・バラスで装飾して上面の縁に二重口縁壺を並べた。
- ⑤方形壇裾に溝を掘り、木柱を密に立てて丸太垣とし、埋葬施設上の空間を外部から遮断した。

こうした竪穴式石室の構造と、その上部を

周囲から遮断する丸太垣は、生成神的神格と同一視された被葬者を護る施設として、辟邪と評価するに相応しい。

2) 竪穴式石室の朱彩と副葬された鏡

古墳被葬者が神聖なる存在のときに、桜井茶臼山古墳の石室と丸太垣は被葬者の保護装置とみてよいものである

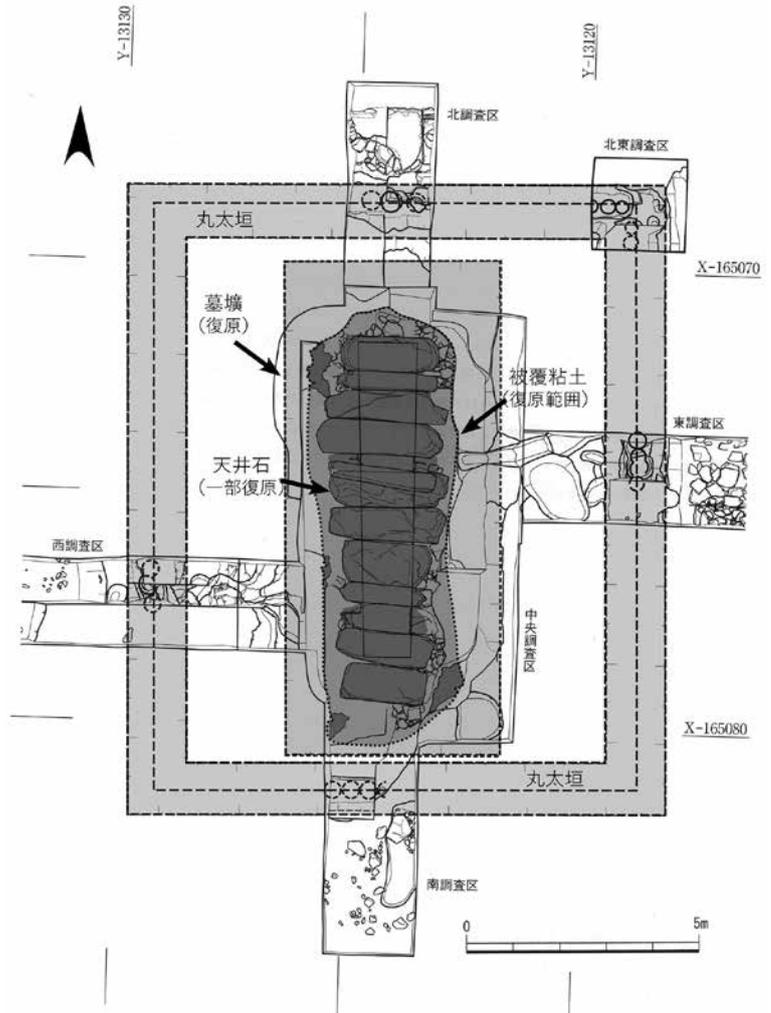


図1 桜井茶臼山古墳の埋葬施設（寺沢 外 2011 から転載加筆）

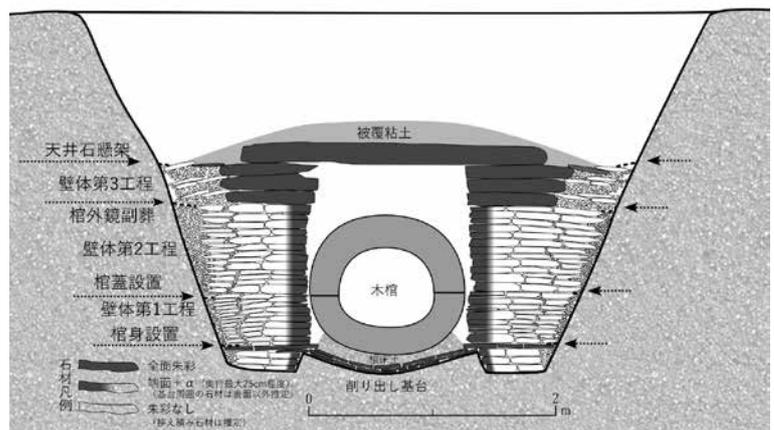


図2 桜井茶臼山古墳墓壇・石室断面模式図（寺沢 外 2011 から作図）

る。ところが石室の朱彩は、外部と接する墓壙面側ではなくて内面側に重きがおかれた。石室基底は全面朱彩の薄板石で覆われ、壁体第1・2工程では奥行25cm程度を朱彩した石材で壁面を構成し、壁体第3工程の大型板石と続く天井石は全面朱彩して設置されたから、朱彩は被葬者の眠る空間を包み込むようである。それに木棺への朱彩とベンガラを混和した天井石被覆粘土が加わるから、朱等の赤色顔料の用い方は被葬者を保護するものではなくて、封じる効果の期待されたものとの疑いが生じる。また鏡背に神仙世界を鑄出す鏡を棺外副葬する場合には、棺蓋上へ配置して鏡面を棺内に向ける黒塚古墳等の例がある。多数の鏡面を被葬者方向に向けることを被葬者の保護、あるいは被葬者昇仙の呪法として了解するためには、納得できる根拠が示されなければならない。

古墳埋葬施設での朱・鏡のあり方については、道教にもとづいた解釈をみることがある。次章では、『抱朴子』等にもみる朱・鏡に関する記述と古墳前～中期における朱・鏡の出土状態とを比較して、既存の考古学的理解を検証する。併せて、倭地における中国の死者観と道教的思惟の受容に関しても、なにかしらの情報をえたい。

IV. 朱と鏡の呪法

1) 中国商代後期～三国時代における死者観

葛洪の『抱朴子』は4世紀前葉の書という。日本列島で大型前方後円墳が築かれるようになった時期である。同書内篇には仙界へのあこがれが溢れている。

先にみた池澤優の研究は、中国古代～中世に死者観の展開があったことを指摘する(池澤 2003)。池澤によれば、西周時代以来の天上他界観は漢代に山上他界観へとひろがる一方で、地下にも他界が存するという信仰も併存するようになったという。また池澤が引用する余英時の研究は、死と仙の関係性について次のようにまとめている。不老不死への願望が最初に表現されたのは西周期であり、春秋期には現世的な不死願望へと発展し、さらに戦国中期以降には他界指向的不死信仰へと展開した。不老不死願望には、死を否定する現世的不死指向と、死と共存可能な他界的不死信仰が共存し、それらが融合・反発して仙界の観念が確立したという(余 1965・1983・1987)。池澤は余の考察を補足して、他界指向的不死信

仰は不死達成の方法として脱世離俗と修行を重視するものであったが、戦国末～秦始皇以降は不死信仰の通俗化・現世化が生じたという。漢武帝の頃には、脱世離俗の要素が脱落して現世を享楽するままに、不死を得ようとするものになり(世俗内的不死信仰)、後漢には仙人世界観は著しく大衆化して、現世的不死の達成者の場所としての仙界という信仰ができあがったとした。

こうした死者観の展開を背景とする『抱朴子』内篇は、仙界へ至る仙薬・呪法を語る一方で、邪悪なものを阻む仙薬・呪法も記す。

2) 朱(赤色顔料)の呪力

『抱朴子』内篇「金丹」は仙薬の作り方と効能を数多く記載する。朱に辟邪・死者再生の効能があるとする日本考古学上の理解には、同書に依拠するものも多いと思われるので、関連する内容を抜粋して録する。

「金丹」は、不老不死・仙人となり仙力を得るための仙薬製法・用法を主として紹介するが、死者蘇生の効能があるとする丹・用法の記載もある。

①九光丹「…欲起死人、未滿三日者、取青丹一刀圭和水、以浴死人、又以一刀圭發其口内之、死人立生也。」

②太乙招魂魄丹法「…長於起卒死三日以還者、折齒内一丸、與硫黃丸、俱以水送之、令入喉即活。…」

古墳被葬者に直接用いられた朱等の赤色顔料は、頭部～上半身の範囲に対する散布状態のものが多い。九光丹の説明にみる一刀圭は、一寸四方の匙にのる量の10分の1という微量という(三保忠夫 1997)。『儀礼』「士喪礼篇」にみる士階級の者が亡くなった当日の儀礼は、「復」⇒「沐浴・飯含」⇒「襲」⇒「重・銘」の順に進む。道教の呪法が儒教的儀礼を侵食するとすれば、「復」・「沐浴」の部分であろう。死者蘇生のために一刀圭の丹の水溶液に溶かしても、目視による発掘で丹を識別できる状態にはならないし、『魏書』東夷伝倭人条の葬祭に死者沐浴の儀礼は記録されていない。加えて、太乙招魂魄丹法の結果に類する被葬者の口から腹部に限定されるような朱の検出例も管見にしないから、古墳被葬者に直接使用された朱等の赤色顔料を『抱朴子』内篇が説明する死者蘇生法に類する呪法の結果と推定することは難しい。

「金丹」には、塗布することで辟邪の効能がある丹・使用法も録されている。

- ③還丹「… 以此丹書凡人目上、百鬼走避。」
 ④伏丹「… 持之、百鬼避之。以丹書門戸上、萬邪衆精不敢前、又辟盜賊虎狼。」
 ⑤威喜巨勝之法「… 丹金、以塗刀劍、辟兵萬里。」
 ⑥羨門子丹法「… 此丹可以厭百鬼、及四方死人殃注害人宅、及起土功妨人者、懸以向之、則無患矣。」

赤色に辟邪の効果があるとする信仰は古い²。中国古俗には、赤色を用いるものに文身鯨面があり、血を用いるものに鬘鼓があるから、辟邪のための丹（朱）の塗布はより効果の高い呪法として提起されたものであろう。丹に邪悪さを防ぐ効果があるとするときに、その積極的な使用は邪悪さを封じ込めることにあった。

死者＝鬼神が災いを及ぼすとの信仰は、商代後期に既に顕著である。殷墟出土の甲骨文には、王に降りかかる災いや病が亡き王によるものかと占卜するものが多数ある。武官村大墓では木槨を閉じて土で被覆した上を朱塗りの木板で覆っていたが（郭宝均 1951）、それも亡き王が現世に災禍を及ぼさぬように企図されたものであろう。死者の祀は極めて重要とされ、後裔の族類がおこなわなければならなかった。『左氏春秋』僖公三十一年傳には「鬼神は其の族類に非ざれば其の祀を歎けず」とある。祖神に対する祀の觀念が倭にもあったことは、『紀』崇神天皇紀七年条のオホタタネコによるオホモノヌシ祭祀から窺うことができる。『魏書』倭人伝倭人条の「卑彌呼事鬼道」、および先にみた藤井康隆の考察（藤井 2019）からは、倭地での亡き首長を生成神的な神格と同一視する祀が3世紀代に遡る可能性さえある。

『抱朴子』は、丹を服薬することに不老不死・蘇生・昇仙の効能があると記す一方で、丹の塗布には邪悪なものを防ぐ効果があるとする。桜井茶臼山古墳埋葬施設の朱彩は、外部に接する面を主とせず、石室内面に重きをおく。この朱のありかたを『抱朴子』で理解する場合には、邪悪なものを防ぐ効能によって、被葬者を石室内に封じることの重きをおいたとの理解に傾く。この理解に真実性があるとする、竪穴式石室にみる朱の用法は、同時代中国の道教的思惟が丹を昇仙薬の中心におくとは異なり、倭地での縄文時代以来の朱の歴史性に関するとの想像を誘う。いずれにせよ、朱の用法は古墳被葬者＝死者に対する同時代のひとの觀念が聖・邪2面的であったとの仮定を否定するものではなく、逆にその可能

性を高めるものであった。

3) 鏡の呪力

黒塚古墳で棺蓋上に副葬された33面の三角縁神獸鏡を参考にする、桜井茶臼山古墳出土の81面以上の鏡の多くも棺蓋上副葬品であった可能性が高い。多数の鏡を棺蓋上副葬することと中国の死者観や道教的思惟は、どのような関係にあるのであろうか。『抱朴子』については後述するとして、管見にした鏡の呪力に関する中国文献には以下のものがある。隋・唐代の王度の『古鏡記』（前野直彬 編訳 1963）は、八寸の大型鏡が化け物を退治し疾病や自然の驚異を払うと記す。段成式の『酉陽雜俎』（860年頃成立／今村与志雄 編訳 1980）は、日南郡に伝世した始皇帝の大型方形鏡が人の五臓を照らすとの伝承を記す。葛洪が編纂したともいわれる『西京雜記』は、先の『酉陽雜俎』のもとになった伝承を載せ、咸陽宮の大型方鏡は胃腸五臓をてらして疾病のありかを示し、宮女に邪心があれば胆がはって心動くところを映したという。前漢代（165 B.C. 以前）には、安徽省阜陽出土の漢簡に『万物』という書があり、「事至れば、大鏡を高く懸ける也」と記して、大鏡に悪しきことを払う力があるとする（文化部古文献研究室 外1988）。いずれも鏡の辟邪の効果を述べるものであった。

『抱朴子』内篇は鏡の2種の呪力を記す。「登涉」は辟邪の効果を述べる。入山する道士が9寸以上の鏡を背中にかけていれば、魔物を写しだし、老練な魔物も近づかないとする。張蓋躡と偶高成は雲臺山で修業した折に、鹿が人に化けて訪ねてきたことを鏡に映して知り、邳伯夷は林慮山麓に泊まった際に、犬が人に化けているのを鏡に映して見抜き追い払ったという。一方の「雜應」は、ひとを神仙世界へ遷移させる呪力のあることを述べる。9寸以上の明鏡で自ら照らすこと7日7夕、ことに4面の鏡を用いて静寂な山林で静思しておこなうと、神仙世界に遷移して老君（老子）にであうことができるとする。このように『抱朴子』は、鏡には辟邪の効果とともに、ひとを神仙世界へ遷移させる呪力があったとした。

近藤喬一は、中国古代の鏡副葬を論じたなかで漆面單に注目し、「辟邪だけでなく不老不死（再生）を願う装置であった」とした。そして黒塚古墳棺外副葬鏡を評して、「墓主に対する辟邪の意もさることながら、鏡に囲

まれた不老不死の世界といったものの中で、墓主が生き続けることを願った、漆面罩の世界の意図を倭的に解釈し葬送風俗の中に取りこんだものとも考えられよう」とした(近藤 2004)。内面に鏡をとりつけた漆面罩の発掘例は前漢後～王莽期に集中する(西村俊範 2012)。『漢書』「霍光傳」服虔の注は、温明(漆面罩)は「形如方漆桶 開一面 漆畫之 以鏡置其中 以懸屍上 大斂并蓋之」と記す。大斂で死者の頭部に漆面罩を被せ、後にその状態を保って棺に納めた。揚州平山養殖場 M 6 号漢墓(揚州博物館1987)等の漆面罩も棺内で被葬者頭部を覆い隠すから、漆面罩と古墳棺内で被葬者頭部周辺に配された鏡との関係性に疑義は生じない。大和天神山古墳の棺内副葬鏡も(千賀 2000)、その延長で考えてよいと思われる。

近藤の理解に疑問が残るとすれば、漆面罩が「辟邪だけでなく不老不死(再生)を願う装置」とする点である。池澤優の『儀礼』「土喪礼篇」の解説によれば、死当日の儀礼で蘇生しないことが確認された死者は、埋葬後の耐祭によって祖先と合一し、生者に恩恵をもたらす祖先として完成する(池澤 2003)。したがって大斂～埋葬に伴う漆面罩は、死者の不老不死(再生)のための器具とはできず、死者の魂魄が迷うことなく天上・山上・地下他界で永世することを願う器具と考えられる。先述した中国文献には、鏡にはひとを仙界に遷移させる呪力とともに、邪悪なものを明らかにして封じる呪力があると記されていた。いずれの効果も鏡面にあって、神仙世界を鑄出すことのある鏡背ではない。漆面罩にとりつけられた鏡も鏡面を被葬者に向けるから、被葬者を安寧な状態のままに、天上・山上・地下他界に封じることが期待されたものと思われる。古墳棺内鏡に期待された呪力も同様に、死者が埋葬空間で安寧に眠り続けることにあったと想像される。それゆえに、古墳棺外副葬鏡を漆面罩と関係づけることには論理の飛躍があり、神仙世界で老君にあう方法を説く『抱朴子』「雑応」で棺外鏡の性格を考えることも理にかなわない。棺内被葬者に鏡面を向けた黒塚古墳棺外鏡33面、一貴山銚子塚古墳棺側出土鏡群(小林行雄 外 1952)、鶴山丸山古墳石棺側出土鏡群(梅原末治 1938)³、小山谷古墳石棺蓋に陽刻された鏡等は、中国文献にみる邪悪なものを封じる鏡の効果に倣い、古墳被葬者が邪悪性を帯びて棺外へでることのないように予防した可能性を否定できない。つまり棺外副葬鏡のあ

り方は、古墳被葬者≒死者に対する同時代のひとの観念が、聖・邪2面的であったと仮定することをより強く促すものであった。

4) 朱と鏡の呪力に関する小結

古墳前期前半の前方後円墳は、亡き首長を生成神的神格と同一視して埋葬し、現世につなぎとめて顕示するものと考えられた。その一方で、石室内面・棺等を朱彩し、棺外副葬鏡の鏡面を被葬者に向けた目的は、亡き首長を埋葬施設に封じることが目的にしたと推定され、古墳被葬者≒死者に対する同時代のひとの観念が聖・邪2面的であるとの仮定を促すものであった。大場磐雄が指摘した前期古墳被葬者の身体魂に対する恐怖は(大場 1950)、こうした遺構・遺物のあり方を根拠にすることで、半ば了解することができると思われる。

古墳被葬者≒死者に対する同時代のひとの観念が聖・邪2面的であるとの仮定は、石室朱彩・棺外副葬鏡の概観から成立する可能性のあることが窺われた。これ以降は被葬者を古墳に封じ込めることを呪縛(儀礼)とよぶことにして、次章では古墳葬祭での被葬者呪縛儀礼の存在を具体的に例証する。

V. 副葬された革盾

1) 埋葬施設と革盾

古墳前期前半の埋葬施設にみる朱・鏡のなかには、被葬者を埋葬施設・棺に呪縛するものが含まれていると推定された。死者は邪悪な存在に変わりうるとする死者観が飛鳥時代に遺存することからは、古墳前期後半～中期にも呪縛儀礼の存在が指摘されなければならない。同期には、大型前方後円墳の堅穴式石室に組み合わせ石棺⇒長持形石棺が納められた。埋葬施設・棺への朱彩は継続するが、鏡の棺外副葬は顕著ではなくなり、津堂城山古墳・鶴山丸山古墳に指摘できる程度である。中～小型前方後円墳等では新たに粘土槨が埋葬施設とされた。棺および被覆粘土には朱・ベンガラ塗彩がみられるが(参考:奈良県東大寺山古墳/金関恕 外 2010)、やはり槨外副葬に鏡はなく、革盾がめだつ。そこで本章では粘土槨の革盾副葬に注目し、新しい埋葬施設の登場に対応した新しい呪縛儀礼の創出されたことを検証して、前代以

来の死者観の継続を推定したい。またその成果を受けて、革盾と長持形石棺の関係についても思考する。

革盾の副葬はメスリ山古墳副室例が古い（古墳前期前半／伊達宗泰 1977）。大阪府津堂城山古墳竪穴式石室では巴形銅器10個が棺外から出土した（梅原末治 1920・21）。巴形銅器だけの副葬の可能性もあるが、2・3面以上の革盾を石棺上に副葬していた可能性もある。革盾の棺内副葬の例には、兵庫県茶すり山古墳第1主体がある（岸本一宏 外 2010）。仕切板で区画された埋葬・副葬区計4区の最上部に、計7面以上の盾が副葬されていた。遺存状態の良い西1区盾4の検出面・同裏面図の比較からは、表面を上にして副葬されていたと考えられ、類感呪術的発想によって辟邪の効果が期待されたと思われる。

古墳前期後半以後に革盾検出例が集中するのは、中～小型前方後円墳をはじめとする古墳の粘土槨の上～側面である。革盾は土圧で粘土等に押し付けられ、構造を支えた木材や革は腐朽したが、革に塗布された漆とそれによって保護された紋様刺繍の一部は遺存した。革盾の検出に最初に成功したのは、小林行雄による1935年の大阪府豊中狐塚古墳調査である（小林 1962a）。小林は、その後の三重県石山古墳での成果と『延喜式』等の文献を踏まえて、革盾の基本構造を明確にした（小林 1962b）。橋本達也（橋本 1999）・青木さやか（青木 2003）は、革盾の形態研究をさらに進めた。それらによると革盾には二つの平面形がある。ひとつは、上端が外方に弧を描き、身本体は長方形の平面形をもつものであり（I類／青木 2003）、他は概して細高い台形の平面形をもつものである（II類／青木 2003）。青木I類は縦約1.6m・幅約0.6m前後の規模を中心とし、青木II類は1.3m・幅約0.6m前後の規模のものが多く、革盾は、遺存した隅金具からみて革を含めた厚さが0.7～1.5cmであり、枠材には約1.5～2.8cm幅の木材が用いられたと復原される。

革盾検出は漆膜の遺存に頼っておこなわれる。盾の副葬時の表裏は、巴形銅器がある場合を除いて、知ることが極めて難しい。多面の革盾が副葬された大阪府塚古墳・滋賀県新開古墳等でも、副葬時の盾の表裏に関する記述がみえないことは無理のないことである。そうしたなかで革盾の副葬状況を詳細に検出した事例がある。

2) 裏面を上にした革盾

埋葬施設に向けられた盾のあることは、1947～8年の大阪府黒姫山古墳（中期中葉）調査での後円部上面外周埴輪列中の盾形埴輪群検出から注意されるようになったようだ（森浩一 外 1953）。革盾では、1950～1年の三重県石山古墳（前期後半）調査で、中央槨北部c8盾に取り付けられた巴形銅器が裏面を上にして検出されたことから、表面を下にした副葬（以下、裏面副葬と略称）のあることが確認された（京都大学文学部博物館 1993）。

穂積裕昌は革盾の裏面副葬に儀礼のある可能性を推定した（穂積 2012）。穂積は、表・裏面副葬の盾が併存するなかで、裏面副葬の盾は「永久に遺体を封印し、現世との関係を絶つ」ものと理解した。『令集解』「養老薄葬令親王一品条」が引く『古記』遊部事によって、「死者の霊が「荒びたまう」場合がありえたと観念されていた」とし、同観念は盾の裏面副葬を媒介にして古墳時代に遡行させることができるとした。しかし穂積の立論には問題点が残る。第1に、革盾の表裏分析例が少なく、立論の柱である表裏判定を報告書に頼って、客観的な判定基準を欠いている。第2に、『古記』成立が8世紀のときに、当時の官人層は中国儒教の葬祭や死者観の知識を有していた。令関係文書を論拠とするには、死者の霊が荒ぶるとする観念が中国由来ではなく、倭地の古俗であるとする論証と、革盾裏面副葬が同古俗に対応した儀礼とする追検証が不可欠であるが、それを欠いている。

小稿では、巴形銅器を付属しない革盾の表裏判定基準に、大阪府御獅子塚古墳（古墳中期前～中葉）第1主体（粘土槨）南東部から出土した盾を用いる（豊中市教育委員会 1990 p.13右写真「全貌をあらわした盾（東側）」／図3）。同盾は横棧材・把手材圧痕が明瞭である。青木は、盾痕が低いアーチ状を呈し、中央が上に湾曲することを根拠にして表向きとする一方で（青木2003 p.70註3）、「棧と把手の圧痕と重なる箇所、粗いピッチの革帯が紋様面を横断する」と観察所見を記す（青木 2003 p.60）。把手に関連する革帯が紋様面上にみえることは、盾裏面が上にある状態といえ、青木の表裏判断には矛盾がある。盾は取り上げられて反対の面の検出がおこなわれ、現在は両面が観察できる状態にある。同資料を実見すると、検出面側にみる横棧材痕の両端は枠材の内面に接し、横棧材の下には漆膜が広がるから、盾は裏面副葬された

ものであった。このことから巴形銅器を伴わない革盾については、横棧材・把手痕が明瞭で、刺繍紋様全体には乱れがなく、把手痕部分の刺繍紋様が不明瞭な場合に、裏面副葬である可能性の高いことが指摘できる。

なお、御獅子塚古墳第1主体南西から出土した盾は、横棧材・把手の痕跡は残るが、漆膜は遺存していなかった。横棧材・把手材が凹痕を明瞭に残している点は、東側盾に共通する。土圧で逆反り状態に変形したとみなすことになるが、本盾も裏面副葬であった可能性がある。また、青木の指摘する他例での把手部に伴う革帯の観察が正しいとすると、福井県天神山7号墳・向出山2号墳革盾もまた裏面副葬であった可能性が生じる。

京都府二子山北墳（古墳中期後葉／図4）の西槨上から出土した革盾は、杵材・横棧材・漆膜等の遺存状態が御獅子塚古墳第1主体部南東盾にすこぶる似ている（杉本宏 外 1991）。刺繍紋様の全体像が残る漆膜の中で、横棧材痕が4条の窪み線となって漆膜のひろがり遮断し、把手部分の漆膜が不明瞭な点は特に類似しており、本例も裏面副葬であるといえる。

石山古墳の方形墓壙内には、北東—南西に長軸をとる木棺を納めた3基の粘土槨が南東—北西に並列していた。

中央槨と東槨では、被覆粘土上部からその裾にかけての範囲に、粘土槨長軸に沿うように計10面の革盾が副葬されていた。公開された情報では、中央槨北部出土のc8盾が巴形銅器から裏面副葬であることが示されているが、公開された写真には他にも裏面副葬を示すものがある（図5／京都大学文学部博物館 1993）。

東槨北部のe1盾は、頂部を西南西方向に向けたもので、表面には東西2列・上下3段に巴形銅器6個を取り付ける。東側の列の巴形銅器3個は、盾の東に南西向きおかれた鞆の西辺に沿って出土した。盾頂部側の巴形銅器2個が裏面をみせるのに対して、北の1個は表面をみせる（図5右上／京都大学文学部博物館 1993 写真54）。頂部側2個の周囲の漆膜は乱れが少ないが、北の個体の周囲の漆膜は散在する。この状況は盾が裏面副葬とするときに整合的に理解できる。鞆に一部を重ねておかれた盾は、頂部を鞆より西に振り、盾の中央東辺は鞆の北西部を覆った。土圧を受けた盾は、頂部側が直接に槨上に密着して巴形銅器2個が裏面をみせるのに対して、鞆に架かった部分は鞆西側面に折れ込み、同部位の巴形銅器は反転して上を向くことになった。青木・穂積は同盾を表向きとしたが、同盾は裏面副葬であった。

東槨南東部のee1-③盾（京都大学文学部博物館 1993 p.105 158 盾3号）は、下面に土砂が入り込むことで、縦軸を中心に左・右杵材方向に湾曲して反り返る状態を保つ。横棧材の各痕跡は左・右杵材内端を直線で結んで平行に並び、それぞれが漆膜の広がり遮断し、それぞれが漆膜の広がりを遮る（図5右中）。杵材を覆う漆膜がみえて、横棧材部分の漆膜だけがないことは、横棧材が上から抑えて漆膜を破断したとも、あるいは横棧材の下の漆膜が検出写真の時点ではみえていないとも推定される。総じて御獅子塚古墳第1主体部南東盾の検出状況に類似し、盾は裏面副葬と考えられる。

東槨—中央槨間に副葬されたec1-⑤・⑥盾もまた、裏面副葬の状態が立体的に検出された（京都大学文学部博物館 1993 p.105 159 盾6号）。同盾杵材の検出状態は、両側辺と上辺が上方に突出する。革を杵材に巻き付け、鋌・目釘等で留めた上で、漆を塗布したことを示すものである（図5右下）。上・下辺材や横棧材は、

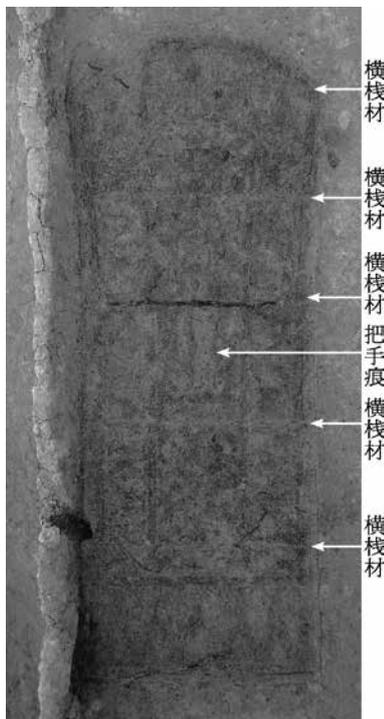


図3 大阪府御獅子塚古墳第1主体部東側盾
（豊中市教育委員会 1990 に加筆／転載）

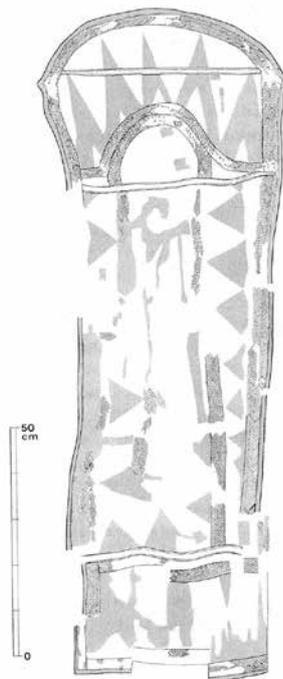


図4 京都府宇治二子山古墳北墳西槨出土盾

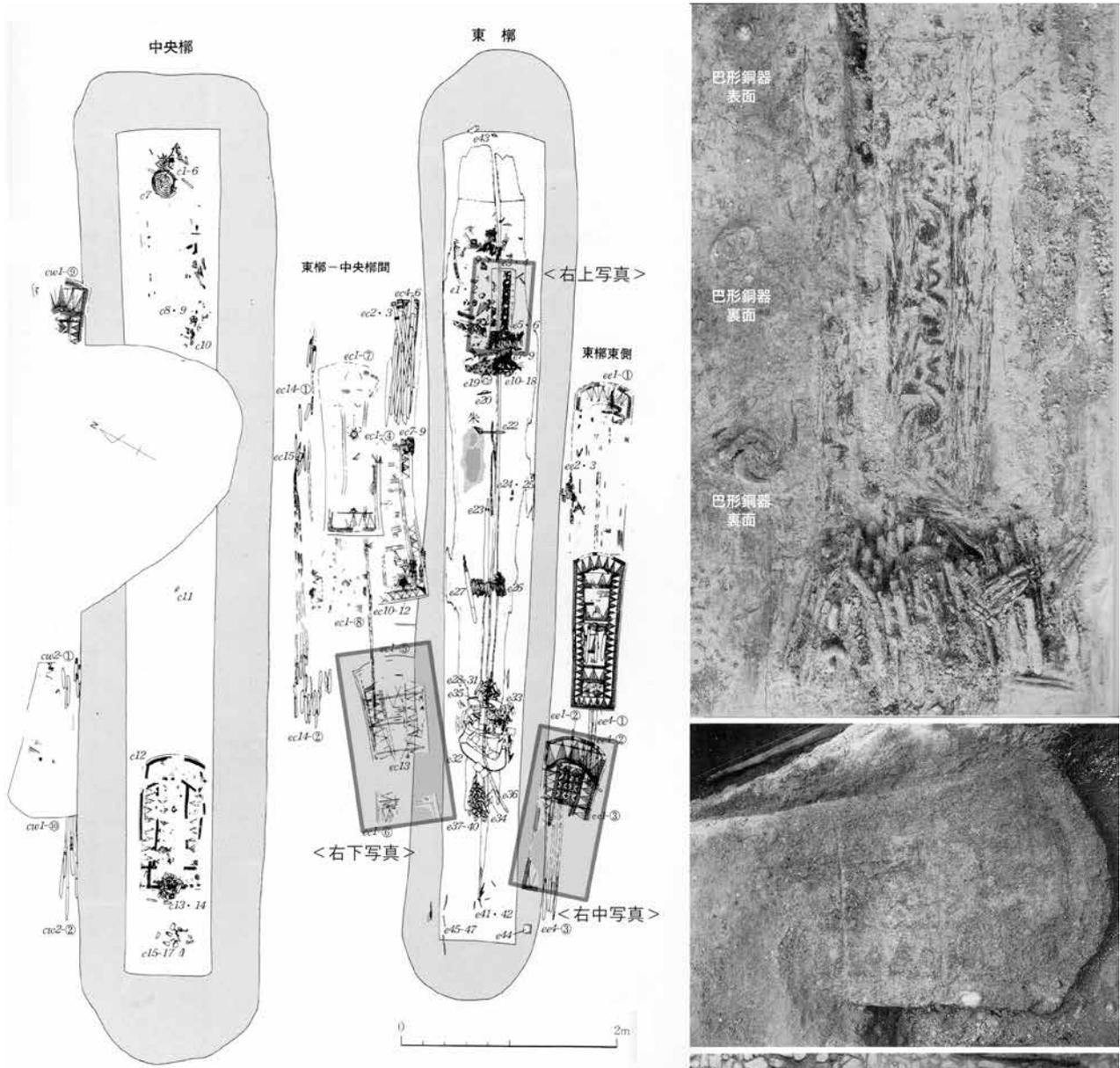


図5 三重県石山古墳（京都大学文学部博物館 1993 より転載
 ／京都大学考古学研究所蔵・保管資料）

- (左) 中央塚・東塚上遺物出土状況図（写真範囲筆者加筆）
- (右上) 東塚北部の e 1 号盾と鞆（注記筆者加筆）
- (右中) ee 1-③ 盾（盾 3 号）
- (右下) ec 1-⑤・⑥ 盾（盾 6 号）

表面に向けて弧を描いて迫りだすから、革の張力に負けない強度と粘りをもつ木材（例えば桑材）を熱変形等したものであろう。杵材・横棧材・漆膜の関係は ee 1-③ 盾と同じであるが、横棧材痕跡が微弱にみえるのは、横棧材痕を残して膜面を追求した結果とも、あるいは盾裏面の漆塗布が省略的であって腐朽が進んだ結果とも推

定される。いずれにしても盾は裏面副葬と思われる。

宮城県春日社古墳（古墳中期後葉～後期前葉）第 2 主体棺外副葬の革盾は、青木Ⅱ類に分類されるものである（図 6／仙台市教育委員会 2011）。概して縦長の台形を呈し（高 120cm×下幅 72cm）、鋸歯紋等が刺繍された革の表裏に漆を施す。報告は表面を上にした副葬とするが、以下の点

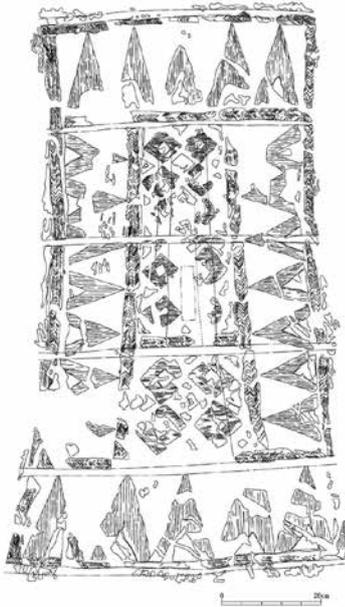


図6 宮城県春日社古墳出土盾

で裏面副葬とすべき資料である。

横棧材と把手の痕跡は浅い窪みとして検出された。横棧材の圧痕下には湾曲するように破断した漆膜が沿う。また、把手痕は深さ1 cm程度の長方形であり、周囲の漆面には乱れがない。仮に、盾が表面を上にして副葬されたのであれば、枳材・横棧材・把手の上面

の革は土圧で下に押し下げられるから、横棧材・把手上の革・漆膜は材痕の上で破断する。把手上の革・漆膜は裂けて四方へ収縮するとともに、横棧材上の革・漆膜も材に沿うように生じた亀裂がひろがって、裂けていない側へ収縮変形すると想像される。検出された漆膜は把手部分を除いて原形を留めており、漆膜上に横棧材・把手痕があるから、盾は御獅子塚古墳第1主体部南東盾同様に裏面副葬であった。

大阪府高塚山古墳（古墳中期前葉）では、粘土槨外方から検出された革盾が裏面副葬と報告されている（末永雅雄 1991）。ただしその根拠は記録されていないので、小稿での検証はできていない。

3) 裏面副葬された可能性のある革盾

管見にしたなかで裏面副葬の可能性のある盾をみる。豊中狐塚古墳（古墳中期中～後葉）例は、革盾検出に最初に成功した事例であった（図7）。粘土槨に沿って東西に並べて配置された3面の内、中央の1面が青木Ⅰ類であり、東・西が青木Ⅱ類である（豊中市 2005）。中央の盾を『古代の技術』（小林 1962a）・『新修 豊中市史』（豊中市 2005）掲載の写真でみると、漆膜はほぼ全体が残っており、棧木・把手痕を指摘できる。棧木・把手以外の部分は刺繍紋様が明瞭であるのに対して、把手部分の漆膜がやや不明瞭なことは御獅子塚古墳第1主体部南東盾に共通する。土圧を受けた横棧材・把手が、上から漆膜

に影響を与えた状態であり、盾は裏面副葬であったと考えられる。

富山県谷内21号墳（古墳中期前～中葉／図8）では、東西方向に直葬された割竹型木棺の上に革盾が副葬されて、棺の陥没痕に沿って出土した（図8／伊藤・塚田 1992）。綾杉紋様の縫い刺しの交差位置に沿うようにして、小さな丸い漆膜の点の列がみえる。点の間隔は比較的一定で、綾杉紋の繊維幅よりは広く、綾杉紋の縫いの交差位置からは少し横に外れている。丸い漆膜の点が綾杉紋等の

刺繍された革表面にフリンジ状のものを縫い返した痕とすると、盾は裏面副葬であったことになる。

京都府二子山南墳（古墳中期後葉）の箱形木棺上から出土した革盾は、中央に長方形鉄板（下辺幅11 cm×高38.5 cm／図9上）があり、下辺両隅には隅金具（図9下）が取り付けられていた（杉本 外 1991）。長方形鉄板は、



図7 大阪府狐塚古墳出土盾概念図

（豊中市 2005 図版248から筆者作成）



図8 富山県谷内21号墳盾
（伊藤・塚田 1992／転載）

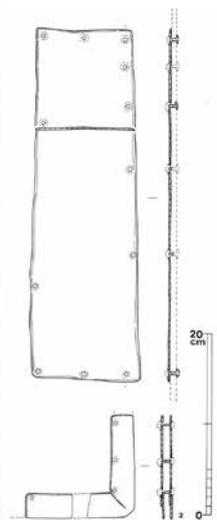


図9 京都府宇治二子山古墳南墳革盾付属金具
（杉本 外 1991／転載）

『延喜式』『兵部寮式』踐祚大嘗会新造神楯にみる面金に類するものとされ（青木 2003 p.58）、盾は表面を上に向けていたと考えられた。

しかし長方形鉄板を面金とすることには疑念が残る。面金とされた大阪府峯ヶ塚古墳例（下辺幅18cm×高さ70cm）・福岡県沖ノ島7号祭祀遺跡例（下辺幅10cm×高さ53.5cm）は、青木Ⅰ類盾を縮小した平面形をもつ点で二子山南墳例とは異なる。福岡県沖ノ島7号祭祀遺跡例には外周に沿って3～4cm間隔で鉤孔があり、左・右辺の鉤孔は対称の位置にあって装飾性を保つ点で、二子山南墳例の鉤孔配置とは異なる。長方形鉄板の鉤孔は、上・下辺では3個を均等間隔に配するのに対し、左・右辺では数・位置・間隔も異なる。左・右辺の鉤頭配置が規則的でないことは、長方形鉄板が装飾性を欠くことを示す。鉤で革と鉄板を一体化する場合に、革側で鉤めると革を傷つけるから、鉄板側で鉤める。長方形鉄板を留めた鉤の足も鉄板側に細いから、鉄板側で鉤めたと推定できる。隅金具についても、杵材を貫く鉤3本のうち中央の鉤の足は検出面側に若干細い。また下2本の鉤足は、盾杵材を少し斜めに貫通しており、検出面側で盾下方に下がる。これらことからみて、隅金具も検出面側で鉤めた可能性がある。鉤頭は製作時に整形済みである。形の整った鉤頭が検出面の反対側に推定されることから、盾表面は検出面の反対側と考えられ、裏面副葬の可能性が指摘できる。

なお、長方形鉄板が盾上下中央に取り付けられたもので、横棧材・下辺杵材が計6材であるとする、横棧材の段間は35cm前後と推定され、長方形鉄板の高さ38.5cmは横棧材上下2本の上辺～下辺間距離に相当する。横棧材2材間に縦に渡された長方形鉄板は、木製把手の補強部材であるか、あるいは鉄板下に帯紐を通して固定することで把手部を形成したものと推定される。

大阪府豊中大塚古墳（古墳中期前葉）第2主体東榔・西榔では、榔上から革盾が検出された（柳本照男 外 1987）。西榔から検出された2面の盾は、紋様の遺存状態を根拠にして、正置（表面を上向け）での副葬と判断された。このうちの東の盾は、漆膜上を赤色顔料が覆う状態であった。報告は漆塗布済みの盾表面に赤色顔料を塗り重ねたとするが、漆膜が二重とは観察されていない。報告を統合的に理解すると、漆膜は盾表面に塗布されたものであり、赤色顔料は裏面に塗布されたものと復原さ

れて、盾は裏面副葬の可能性がある。赤色顔料の塗布が副葬時であれば、埋葬施設の朱彩に通じる。

東大寺山古墳（前期後半）では、棺粘土被覆の終了間際に副葬品を粘土中に封入していた。その榔東側遺物群中に巴形銅器が裏面を上にして一定間隔で並んでいた（金関恕 外 2010）。漆膜の遺存は記録されていないが、報告書の指摘どおりに盾の裏面副葬の可能性はある。

4) 特異な副葬状態の革盾

裏面副葬された盾とは別に、特異な副葬状態の例がある。大阪府和泉黄金塚古墳（古墳前期後半）には、墓壇内に並列して設けられた3基の粘土榔があり、その東榔の西辺に沿って2面の革盾が出土した（森浩一 1954）。2面の盾は、横に倒して一方の側辺が上になるように垂直に置かれていた。付属した巴形銅器の表裏から、盾は表面を中央榔に向けていたことが確認された。3基の粘土榔が並列することでは同様の石山古墳等では、盾の榔外副葬は棺上・棺周囲への配置であるから、和泉黄金塚古墳東榔例の配置が特異なことがわかる。

革盾を横倒しにして墓壇壁に立て掛けた例は、奈良県上殿古墳（伊達宗泰 1966）・市尾今田古墳（今尾文昭 1983）等に知られているが、発掘では表・裏面の向く方向に関する情報はえられていない。先にみた粘土榔での革盾裏面副葬の事例にならうと、墓壇壁に横倒しの状態で立て掛けて副葬された革盾は、表面を棺方向に向けて副葬されたと推定されるから、やはり和泉黄金塚古墳東榔例は例外と思われる。ただし、和泉黄金塚古墳東榔の東側に盾の副葬がみられないことから、中央榔被葬者（の霊威）から東榔被葬者を護ることを目的として、表面を中央榔に向けた革盾を東榔西側に副葬したとすると、例外であることの違和感は薄らぐ。

5) 副葬された革盾に関する小結

粘土榔上へ副葬された盾には裏面副葬されたものが確実にあり、表面上向きとされたものにも裏面副葬の可能性を指摘できるものがあつた。遺存状態の良い革盾に限って裏面副葬であり、またその可能性を指摘できることを基準にすると、表裏不明の盾には裏面副葬されたものがかなりの数含まれていると推定される。伊達宗泰は、粘土榔を覆う盾を辟邪の観念をあらわすものとしたが（伊

達 1997)、粘土槨に裏面副葬された革盾は、被葬者を外界の邪惡なものから護ることを目的にしたとは考えづらい。橋本達也は、副葬される古墳の性格を勘案して威儀具と理解したが(橋本 1999)、裏面副葬の盾は威儀具として取り扱われたともいい難い。類感呪術的な観点に立って裏面副葬された革盾を考えると、古墳被葬者≒死者が外界へ影響することのないように、埋葬施設内部に呪縛することが期待されたものと思われる。

古墳前期後半に登場した粘土槨にも、東大寺山古墳例のように棺被覆の粘土を重ねるたびに赤色顔料を塗布するものがあるから(金関 外 2010)、古墳前期前半以来の埋葬施設等に対する朱彩は引き継がれていた。その一方で、粘土槨には棺・槨外副葬鏡をみないから、裏面副葬の革盾はその代替物の可能性もある。最近に奈良県富雄丸山古墳から出土した盾形鏡は、文様面を下にして副葬されていた点で革盾の裏面副葬と同じである。本来は鏡であっても、副葬時には鏡の紋様をもつ盾として被葬者呪縛のために用いられたと考えることができる。革盾の裏面副葬はいまのところ倭地にしかみられないから、倭地独特の盾の呪術的用法といえるかもしれない⁴。

なお、革盾裏面副葬と同様に棺外副葬鏡の代替である可能性が疑われるものには、奈良県島の山古墳前方部粘土槨上出土の石製模造品がある(西藤清秀 2019)。鍬形石・石釧では表・裏副葬が共存するから、石製模造品の棺外副葬は辟邪・呪縛の2面をもつ可能性も考慮して検討すべきかもしれない。

6) 中国商代後期～南北朝期の盾概観

盾に関する呪法を中国文献に検索したが、管見にでき

なかった。それでも東アジア的視点からは、中国での盾の歴史をみとくことが必要である。ここでは商代後期～南北朝期の盾について概観しておく。

商代後期の盾の例には、河南省殷墟の西北岡1001号大墓骨製裝飾牌があり(表面饗養紋/内田純子 2013)、乙組7号基址には戈・盾をもつ武人の奠基がある(石璋如 1959)。奠基の武人は王陵の腰坑と同じく壘氣を払う者であろう(白川静 1972)。西周～春秋期の盾には、陝西省宝鶏茹家庄西周墓(表面龍紋・銅飾/宝鶏茹家庄西周墓発掘隊 1976)・三門峡虢国墓地(表面赤彩・青銅製飾鉞/李書謙 2011)等の例がある。戦国期の盾には、湖北省李家台4号墓(木盾・表面漆画/荊州博物館 1985)、湖北省包山楚墓(革盾/湖北省荊沙鉄路考古隊 1991)・曾侯乙墓(革盾・表面龍・鳳漆画/湖北省博物館 1989)等の例がある。秦以後は持盾傭が顕著になる。陝西省始皇陵兵馬俑坑・陝西省楊家湾村漢墓陪葬坑(咸陽市博物館 1966)を初めとして、後漢～隋唐期に多数の例があり、持ち盾の用法を具体的に知ることができる。また盾を描いた例には、後漢代の山東省武氏祠前石室・河南省西高穴2号墓(河南省文物考古研究所2010)等の画像石のほか、内モンゴル自治区和林格爾漢墓壁画(内モンゴル自治区博物館文物工作隊 1978)があり、南北朝期には敦煌莫高窟第285窟壁画がある。

上記資料の盾の正面観は、戦国～晋代のものでは上半が宝珠形で下部の四角いものが多く、包山楚墓には長方形のものもある。前漢代になると、湖北省江陵鳳凰山8号漢墓(長江流域第2期文物考古工作人員訓練伴班 1976)に亀甲形を呈するものがあり(高32cm・幅20.1cm)、江蘇省獅子山漢楚王墓には鉤鑲(全高92cm/盾部高36cm・

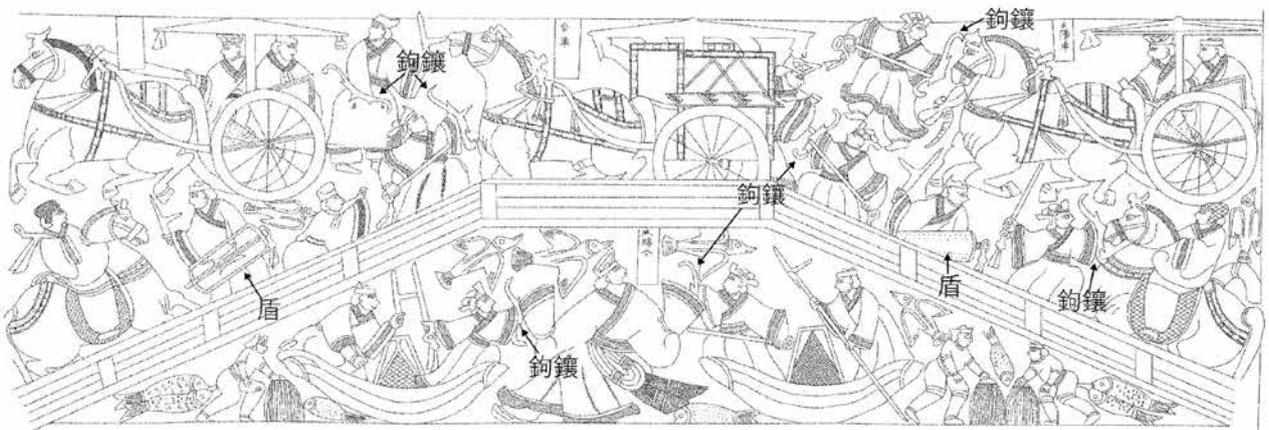


図10 河南省西高穴2号墓出土画像石 七女爲父復仇図(部分/鉤鑲・盾・→は筆者加筆)

幅15cm)がある(獅子山楚王陵考古発掘隊 1998)。河南省西高穴2号墓の画像石には、長方形で上・下辺が緩く弧を描く持盾と鉤鑲がみえる(図10)。前者は南北朝以後の持盾俑に広くみられ、表面には獅嚙紋・歳刑神図等が表現されることが多い。敦煌莫高窟第285窟西壁南部では、横向きの力士がもつ半球形の盾に人面様の紋様が立体的に表現されていて、他者を威嚇する紋様と考えられる(文物出版社 2013)。こうしてみると、盾をもつ武人に辟邪の効果を期待することは商代に遡り、南北朝期に下ると持盾俑として墳墓に広く副葬された。

7) 古代日本の盾に関する記事

古代日本では盾はどのような存在であったのであろうか。以下に、『記・紀』の盾に関する記事・説話(神名・人名・地名を除く)を抜粋する。

- ①神代下第九段一書 … また百八十縫之白楯を供造る。… 紀國忌部遠祖手置帆負神を以て定めて作笠者とす。彦狹知神を作盾者とす。
- ②神武天皇記 … 爾御船に入れし楯を取りて下ろし立たせたまひしが故に、その地を號けて楯津と謂ひて、今は日下之蓼津と云ふなり。
- ③崇神天皇紀九年条 … 天皇の夢に神人有して誨へて曰はく、赤楯八枚・赤矛八竿を以て墨坂神を祠れ。また黒楯八枚・黒矛八竿を以て大坂神を祠れと。
- ④崇神天皇記 … 宇陀の墨坂神に赤色の楯矛を祭り、また大坂神に黒色の楯矛を祭り…。
- ⑤垂仁天皇紀三十九年十月条一書 … 楯部・倭文部… あわせて十箇品部をもて五十瓊敷皇子に賜ふ。
- ⑥成務天皇紀五年九月条 … 國郡に造長を立て、縣に稻置を置く。並に楯矛を賜ひて以て表とす。
- ⑦仁徳天皇紀十二年七月条 … 群臣及び百寮を集へて、高麗の獻る所の鐵の盾・的を射しむ。諸人的を射通すことを得ず。唯的臣祖盾人宿禰のみ鐵の的を射て通しつ。
- ⑧用明天皇紀二年四月条 … 毗羅夫連手に弓箭・皮楯を執りて、槻曲家に就きて晝夜離れずして大臣を守護る。
- ⑨推古天皇紀十一年十一月条 … この月に皇太子、天皇に請したまひて大楯及び鞞を作る。
- ⑩天智天皇紀三年二月条 … その伴造等の氏上には、

干楯・弓箭を賜ふ。またその民部・家部を定む。

- ⑪天武天皇紀上元年七月条 … ここに赤麻呂等古京に詣て、道路の橋の板を解ち取りて楯に作り、京の邊の衢に堅て守る。… 果安追ひて八口に至りて企りて京を視るに、街毎に楯を堅つ。
- ⑫持統天皇紀二年十一月条 … 殯宮に適でて慟哭る。ここに奠奉りて楯節舞奏る。
- ⑬持統天皇紀四年正月条 … 物部麻呂朝臣大盾を樹つ。神祇伯中臣大嶋朝臣讀天神壽を詞む。

①・⑤は、古代に盾作りの專業集団があり、丁寧な縫製の革楯が作られ、楯作りの神が祀られていたことを伝える。②・⑦は楯に関係する地名・人名説話であり、⑧・⑪は革・木楯を用いた戦闘記事である。⑥・⑨・⑩は楯が威儀具であることを示し、③・④・⑫・⑬は祭器でもあることを示す。③・④とそれに前後する崇神天皇紀五年条～十年条は、災禍を鎮めるために神を祀って王畿を鎮めた後に、畿外の地を王化するための四道將軍派遣記事へと続く。ある時期の大和王権の王畿の東・西界が墨坂・大坂であった記憶を伝えるとともに、楯・矛に辟邪の効果が期待されたことがわかる。また⑬では、楯が即位儀礼の場を護るために用いられていた。

以上のことからみて、楯は7世紀末以前には武器・威儀具であるとともに、辟邪の効果も期待されていた。しかし『記・紀』には、⑫を除いて葬祭に用いられた楯の記事がない。⑫も殯宮儀礼中での楯舞であって、埋葬儀礼に伴うものではないから、死者呪縛に関係するものではない。推定するに、死者に楯を裏面副葬することは古墳中期末～後期初で終焉し、その儀礼は後代に伝承されることなく忘れ去られたものと思われる。

8) 革楯と長持形石棺

革楯を粘土槨外に裏面副葬する事例によって、被葬者を埋葬空間に呪縛する儀礼が一部変形しながら古墳前期後半～中期に継続した可能性を推定した。埋葬施設・棺への朱彩は古墳前期後半～中期に継続するが、棺外副葬鏡は稀になることが注意された。竪穴式石室の石棺への棺外副葬鏡例には津堂城山古墳・鶴山丸山古墳がある。長持形石棺は大王の棺と表現されるほどに大型前方後円墳に用いられるものであるが、棺外から鏡3面の出土した津堂城山古墳を除くと、棺外副葬鏡の存在は明確では

ない。発掘例・盗掘記録が少ないことを勘案して、先行する組み合わせ石棺例を含めてみても、検出事例数にはかわりがない。長持形石棺の成立時期は粘土槨の登場時期に近い。粘土槨に随伴して革盾の裏面副葬がみられるとすると、長持形石棺の成立経緯にも棺外副葬鏡に代わる呪縛儀礼的要素のあることが疑われる。そこで革盾の検討の最後に、革盾と長持形石棺の関係性についてふれ、同石棺が死者に対する辟邪と呪縛の効果を併せもつ器物として考案された可能性について愚考する。

大型前方後円墳の竪穴式石室に納められた棺は、古墳前期前半～後半のなかで長大な割竹形木棺から組み合わせ石棺へ、そして長持形石棺へと変遷した。棺の機能が被葬者に対する辟邪・呪縛にあるとすれば、木棺よりも堅固で重量のある石棺が気密性の高さから選択されたと推定される。長持形石棺の形態は、西晋代の棺（例：敦煌仏爺廟湾 M37 号墓出土木棺／戴春陽 編 1998）との間に全体観としては類似を感じるものの、縄掛け突起・蓋石亀甲装飾・小口板方（円）形突起に関して類縁性がない。長持形石棺の縄掛け突起は、組み合わせ石棺のそれを祖形とするが、蓋石亀甲装飾・小口板方（円）形突起は組み合わせ石棺にも起源が指摘できない。

そこで小口板方（円）形突起について、長持形石棺成立時に新しく必要となった機能の形象として整理してみる。組み合わせ石棺と長持形石棺を比較すると規模の拡大が顕著であるから、長持形石棺になって小口板も大きくなり重量も増した。組み合わせ石棺の小口板が方形であったのに対して、長持形石棺のそれは蓋石の裏面形状に沿って上辺が緩く弧を描く。大型化して重量が増し、弧を描く上辺をもつ小口板に生じる不都合は、運搬時の掛け縄が滑りやすくなることである。その対策として上辺近くに突起を作れば、表・裏面のいずれかに1個または2個であっても、縄のかけ方が少し変わるだけで、滑り止め機能は果たされる。想像を逞しくすれば、方（円）形突起は船で垂下して運ぶための縄の滑り止めとして加えられた部位であり、装飾としても適うように造形されたと理解される。

小口板の形状変化が、蓋石の形状変化に従

属したものであるという先の理解が正しいためには、亀甲装飾を伴う蓋石の成立事情が説明されなければならない。小稿では、長持形石棺蓋石の形状と亀甲装飾に関して、革盾との類似性に注目する。被葬者を覆う革盾には兵庫県茶すり山古墳例があるから（岸本一宏 外 2010）、長持形石棺蓋石を革盾と比較することはあながち無謀とはいえない。しかも亀甲装飾のある長持形石棺蓋石の平側・断面形は、革盾のそれに概して近い。

一方で、亀甲装飾は袈裟襷紋風であり、革盾の紋様構成とは異なる。和田晴吾は棺を縛る帯痕跡としたが（和田 2022）、蓋石形状の成立を含めての説明ではない点で納得ができない。革盾には槨外副葬として裏面副葬があった。革盾裏面には黒漆を一面に塗布することが多い。革盾裏面に単色の漆を塗布すると、構造材が目立ち、刺繍紋様は輪郭が視認できる程度となって、裏面観は亀甲装飾に近づく。裏面副葬の革盾は持盾であった。青木 I 類のものは高さ1.5～1.7 m程度を測る。蓋石に亀甲装飾をもつ長持形石棺は長さ3 mを超えるから、革盾に類似を求める場合には持盾ではなく置盾に期待することになる。崇神天皇紀にみる宇陀墨坂神と大坂神に捧げられた盾は奉獻したままにするものであるから、古代に自立装置を備えた置盾が存在した可能性はある。『延喜式』兵庫寮式には踐祚大嘗会神盾の規定がある。同盾は高1丈2尺

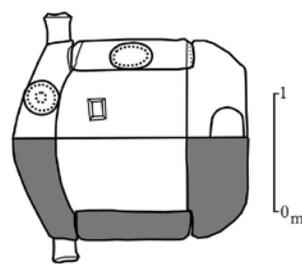


図11（左・下中）
大阪府津堂城山古墳長持形石棺

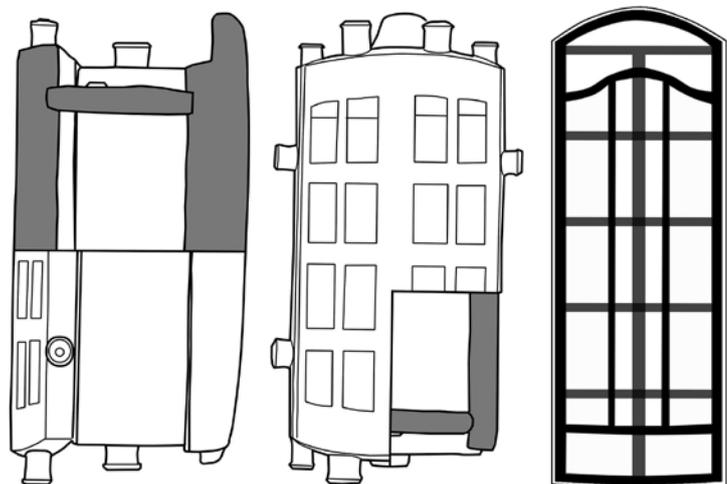


図12（下右）革盾裏面観
支柱をもつ置盾背面（推定）

4寸(約3.7m)・上幅4尺4寸5分・中幅4尺7寸・下幅約3尺9寸であり、極めて大型である。同盾は裏面に布を貼って補強し、その上に漆を塗布した。置盾は壁立て掛けや杭留めのものでない限り、ヒンジ機能のある支柱を裏面のなるべく上部に取り付けることが不可欠である。ヒンジ機能は紐でも果たせるが、支柱の規模と位置は盾を転倒させないことが必須である。青木I類類似の置盾を想定する場合、支柱上端が盾中央ではバランスが悪く、盾のかなり上部に取り付けることになる。つまり革置盾の裏面は、補強の布の上に漆が広がることで、差し縫い紋様よりは構造材が目立ち、その上を支柱が上下に通る。それを1点透視図法で模式化すると、亀甲装飾により近くなる(図12)。

革盾を長持形石棺蓋石のデザイン原案とすることは、棺に辟邪の効果を付与する類感呪術的発想として疑問はない。その一方で、長持形石棺蓋石の亀甲装飾は置盾の裏面観との類似が窺われることから、被葬者の呪縛に相応しい紋様と思われる。揣摩臆測ではあるが、亀甲装飾をもつ長持形石棺は組み合わせ石棺の蓋石を革盾に似せた立体形に変更し、革盾の裏面観をデフォルメした紋様を施して辟邪・呪縛の2面性をもたせ、亡き首長を護るとともに石棺に封じることが企図したものと考えられる。津堂城山古墳では長持形石棺を革盾で覆った可能性があるから、盟主的首長クラスの被葬者には、さらに呪縛を重ねる必要があるとされたのかもしれない。

なお、小稿の亀甲装飾理解が妥当とすると、亀甲装飾のない長持形石棺蓋石は木製盾のデフォルメとなり、置盾には素材で序列があったことになる。

VI. まとめにかえて

1) 古墳被葬者≒死者に対する観念の2面性

ギリシャ自然哲学を背景にしたカール・マルクスは、「死は、特定の個人にたいする類の無情な勝利として、両者の一体性に矛盾するよう見える。だが特定の個体とは一定の類的存在者であるにすぎず、そのようなものとして死をまぬかれない」(Karl Marx 1844/藤野渉訳 1963)とした。また吉本隆明は、「人間にとって〈死〉が特異さをもっているとするれば、生理的にはつねに個体の〈死〉としてしかあらわれないのに、心的にはつねに

関係についての幻想の〈死〉としてしか現れない点にもとめられる。…この不可能さの根源的な原因をたずねれば、〈死〉において人間の自己幻想(または対幻想)が極限のかたちで共同幻想に〈侵蝕〉されるからだという点にもとめられる。…〈死〉の様式が文化空間のひとつの様式となってあらわれるのはそのためである」とした(吉本 1968)。マルクス・吉本ともに冷徹とさえ思われる死の解析である。私事であるが、半身麻酔の手術中に血圧低下で気を失ったことがある。意識が朦朧とした後の、目が覚めるまでの記憶はなにもなく、ひとは自らの死を知ることがないことを理解した。死の心象は、親族の死によって類的永続性が破断することへの恐れや、戦争による死のようにひとの存在が時代社会に蚕食鯨呑されることで形成される。そのために死者観とそれに伴う葬祭も、時代と社会組織にしたがって変化してきた。

小稿では、古墳前期前半の大型前方後円墳被葬者は生成神的神格と同一視された存在であり、前方後円墳は神聖な存在が埋葬されていることを顕示するものと考えた。その一方で『紀』神話からは、死者は生者に害を及ぼす邪悪な存在に変わるとの観念が古代日本にあったと推定した。実際に古墳の埋葬施設・副葬品を例証してみると、被葬者保護の辟邪に加えて、被葬者が棺・埋葬空間からでて悪しき行為に及ばないように、呪縛儀礼のおこなわれていたことが窺われた。古墳被葬者は、生成神的神格と同一視される神聖な存在である一方で、生者に害を及ぼす邪悪な存在にも変わる2面性をもつ者として、同時代のひとに観念されていたと仮定された。

同仮定を古墳前期後半～中期の古墳で検証する場合、埋葬施設・棺に対する朱彩、方形壇埴輪圍繞の継続は既知のものである。これに粘土槨での革盾裏面副葬による呪縛儀礼を追加することによって、古墳被葬者に対する聖・邪2面性の観念が継続して存在したことが確信された。小稿では検証に含めることができなかったが、古墳初期には竪穴式石室とその朱彩、および棺に対する破鏡散布がある。また古墳時代後期には朱彩された家形石棺があり、なによりも死者は邪悪化するという観念が横穴式石室を背景にした神話によって伝えられていた。つまり古墳被葬者に対する聖・邪2面性の観念は、古墳時代を通じて存在したことが確からしいことから、仮定としていたものを仮説として改めて提起したい。

2) 古墳被葬者≒死者のある世界

和田晴吾は古墳初頭～前期前半の古墳埋葬施設の朱・鏡について、「(堅穴石槨の構築／筆者補)では遺体を入念に保護・密封し、邪悪なものへの侵入を防ぐために多くの努力が払われ、工程のさまざまな段階に、赤色顔料を塗布し、多量の鏡を棺外に副葬する場合に鏡面を外に向ける、この「辟邪の思想」とでも呼ぶべきものは、古墳出現前夜に槨とともに伝わった中国の葬送思想の中核をなす一要素であった」とした(和田 1989)。また辰己和弘は、「被葬者の遺骸や棺の内面、さらには埋葬施設を構築するいくつかの段階で、邪霊を払う意味を込めて赤色の顔料が塗られる」とし、鏡については「(神仙世界を表現した／筆者補)銅鏡をたくさん副葬すればするほど、その被葬者の靈魂は神仙世界にたどりつくことが保証されると考えられていた」とした(辰己 2011)。しかしこれらの古墳被葬者≒死者観は、古墳埋葬施設での遺構・遺物のあり方や、古代中国の死者観に関する研究成果、および『抱朴子』内篇等との対比においては、十分に立証された内容とはいえない。

古墳前～中期における死者観については、道教に明るい研究者が神仙世界を援用して説明する場合があるように、倭地の朱・鏡の用法と道教的思惟との関係性の否定は難しい。その一方で、革盾の裏面副葬からは、倭地独特の死者呪縛儀礼の存在も推定された。こうした状況では、古墳前～中期における道教的思惟の波及は直接的・包括的とは断定できず、倭地の時代社会で選択受容され、時間経過に沿って変容したと憶測するに止まる。死者観も同様と思われ、同時代中国の死者観がそのままに倭地に強く影響したと現時点で断定するのは難しい。

辰己和弘は、古墳時代の様々な墓制の併存を背景にして、「彼らが生活の基盤とするそれぞれの地域における、漠然とした「はるか彼方」に他界をみていた」とした(辰己 2011)。そして古墳出土の船関連資料に注目し、「被葬者の靈魂を他界へといざなう乗り物である」として、「職掌をはじめとした個々の被葬者の生きざまを顕彰するものではない」とした。古墳以外の墓制については、筆者も辰己に賛同するところがある。しかし大・中型前方後円墳において、船関係資料が埋葬施設上の埴輪圍繞中におかれた例を知らない。例えば東殿塚古墳の船の線刻絵画のある埴輪は、前方部西辺(南西部)の墳丘基底段外

方に造られた突出部の出土であり(松本・青木 2000)、埋葬終了後の墳丘空間閉鎖時に樹立されたものである。同埴輪を含む埴輪群は、介在する複数の墳丘埴輪列によって、埋葬施設とは遮断されており、後円部に埋葬された首長に直接関係するとみるのは難しい。東殿塚古墳を造営した西殿塚古墳類型造営集団下には、後に大倭氏を称する水運集団がいた(豊岡 2023)。墳丘外端におかれた埴輪にみる船の絵画は、亡き首長が生前に水運を支配して対外交渉にあたったことを顕彰し、葬祭の最後に追慕したとみる方が無理のない理解と思われる。辰己が類例とする三重県宝塚1号墳造出し出土の船形埴輪(松阪市教委 2005)も同様の遺物である。

大型前方後円墳葬祭は、生成神的神格と同一視される亡き首長を地表高く築いた墳丘上部の埋葬施設に埋葬して顕示する一方で、被葬者が生きるひとに災禍を及ぼすことのないように埋葬空間のうちに厳重に呪縛するものであった。同葬祭とその広がり、辰己の評価する地域性とは相いれない。埋葬空間に呪縛された被葬者にとっての死後の世界は、埋葬空間のみであることが前方後円墳葬祭の原則と思われ、他界への遷移は否定される。生きてあるひとの世を此岸とし、死者のある世界を彼岸とよぶときに、古墳前～中期首長の彼岸は支配領域に造営された古墳であった。彼岸が此岸の同一時空に設定され、亡き首長が被支配領域民の視認できる高みに存在し続けることは、彼は死後も支配領域の再生産に関わると観念されていたことを示す。ただし此岸と彼岸の往来は、辟邪・呪縛儀礼によって厳重に断ち切られていた。

折口信夫の「大嘗会の本義」(折口 1930)の影響を受けて、古墳時代の首長葬祭には首長靈継承儀礼が伴うとして考察される場合がある。しかし古墳前～中期の大型前方後円墳を核とする古墳の被葬者は、新首長即位後も生成神的神格と同一視されて辟邪・呪縛儀礼で厳格に扱われた。大場磐雄が前期古墳被葬者を死者とその靈魂の不離一体の状態=身体魂としたことは冒頭にみた(大場 1950)。小稿も、辟邪・呪縛儀礼を施されて埋葬された前～中期古墳被葬者をそれに近い状態と考える。ただし、大場は被葬者を防圧する理由を死の原因になった悪霊が宿るためと説明したが、小稿は被葬者が邪悪な存在に変わるとの恐れから呪縛されたとする点で異なる。

前～中期古墳被葬者が「死者とその靈魂が不離一体の

状態」に近いとすれば、葬祭の構成要素に首長権継承儀礼は想定できても、首長霊継承儀礼は否定せざるをえない。広瀬和雄は、①前方後円墳の何で首長霊継承儀礼が説明できるのか、②儀礼の前提である霊肉分離観念の成立は説明できるのか、③抜け殻である亡き首長の遺骸に多量の「宝器」類を副葬する必然性はどこにあるのか、という疑問によって前方後円墳における首長霊継承儀礼を否定し、前方後円墳で「一定の儀式を経てカミと化した亡き首長は、後円部墳頂の円形区画のなかで、共同体再生産のための品々をもって共同体を守護しつづける、と観念された」とした（広瀬 2003・2009）。その被葬者像は、大場が前期古墳被葬者の死後の世界を神々の世界としたことに不思議に似ている。しかも呪縛儀礼からみた古墳被葬者は、「付与された政治的身体によって属人性はなかば剥奪されていた」（広瀬 2009）というように抽象的存在ではなく、怒りを発することがあるとされるように感情をもつ者であった。広瀬は、天円地方の観念を具現した後円部上面空間での祀により被葬者はカミに化すと説明したが、初期大型前方後円墳には立体形としての類型と方（円）形壇の内容に捨象できない差があり、後円部上部施設によって被葬者の神性を統一的に説明するのは難しい。

筆者は『紀』の祖神祭祀記事と白川静の岳神・河神祭祀の理解（白川 1972）を参考に、古墳被葬者の神聖性は地神祭祀権の掌握に基づくと考えている。地神＝生成神的神格祭祀権は首長権の主たる要素である。支配領域が拡大すると地神群は族類化されて階層をなし、盟主的首長族類の祖神が最高位の生成神的神格に位置する。祖神の祀は後裔族類がおこなうものであり、族類の長として首長が生成神的神格の祀を掌握することは、支配領域すべての地神の祀を掌握することでもあった。それゆえに古墳時代首長は、即位とともに生世神的神格と同一視された。死後の首長は「身体霊」に近い状態と観念され、生成神的神格を構成する後裔首長のひとりとして支配領域中の古墳に葬られて顕示される一方で、怒りを現世に及ぼす場合もあるとされた。正確な比喩ではないが、大型前方後円墳を核とする古墳は生成神的神格と同一視された首長の埋葬の場であり、彼の祭祀権に関わる器物・場を整えて此岸に永久凍結した廟的構築物とみる。よって広瀬説には同意できない。

『尚書』「顧命」にみる王子釗（康王）の即位式は、成王大斂の翌日、祖廟に周王家の宝器を陳列し、卿士邦君の参列のもとでおこなわれた。釗は太保（最高位聖職者／召夷）から王位を象徴する介圭を奉獻され、太史の読む成王遺命に答えた後に、上宗から同瑁（酒杯）を受けて皇天上帝を祀り、王位を継承した。『紀』の持統天皇以前の即位儀礼は内容に2段階をみる。允恭紀・継体紀・宣化即位前紀・推古即位前紀・舒明紀は群臣による璽符の奉獻を即位式とし、孝徳即位前紀・天武紀は踐祚儀礼を整備して大規模化したと伝える。また出雲国造の火継式では、国造が帰幽すると継承者は伝世の燧白・燧杵を携えて神魂神社に赴き、採火した火で炊かれた御飯を食し、口伝の祈禱を黙禱して祖神を祀り、それに続く一連の祀をおこなって新たな国造になるという（平井直房 1977）。千家尊福の『出雲国造葬祭ニ関スル取調書』（1904年）には、「上代出雲国造身退リシ時ハ土葬ナリシカ、其後何レノニヤ本郡菱根池（今ハ無シ）ニ黄牛ニ乗ラシメテ水葬セリ・・・」とある。大浦元彦の研究を参考にすると（大浦 1986）、亡き国造から葬祭が失われたのは、律令体制が出雲国造職を束縛した後に生じた儀礼変化と考えられる。出雲国造火継式は、古墳時代に首長霊継承儀礼を推定する場合の資料とされてもいるが、古墳時代儀礼のに関係づけるには別途証明が必要である。

これらのことと古墳被葬者の神聖性を勘案すると、古墳時代の首長権継承儀礼は被支配族長群が首長権の象徴器物（伝世品とは限らない）を奉獻する共立・服属儀礼と、生成神的神格の祭祀権継承儀礼を核としたと思われる。『紀』は允恭天皇紀以後にレガリアの継承を強調するようになり、飛鳥時代後期の法制化によって天皇即位儀礼は踐祚式として整えられた。即位儀礼の制度化は共立・服属儀礼的色彩を減退させるから、新嘗祭をもとにした大嘗祭を加重して、祖神饗応・共食による新天皇権威の神授の正当性が強調された（岡田荘司 1979）。

3) 古墳前～中期の首長像

筆者が学びはじめたころ、大型前方後円墳を築いた時代社会観は、漢文脈で書かれた『紀』の物語を唯物史観が古代専制国家としてドラスティックに脚色したものであった。1980年代になると王権像は変化し、小規模平野に成立した地域国家の連合が倭王権の成立を導いたとい

うように説明されるようになった。そこにポラーニ・カーロイの学説の影響が加わって、威信財を鍵として倭王権と地域の関係性を読み解く試みが広まった。

初期倭王権の核には奈良盆地東南部の盟主的首長がいた。その死に際して、前方後円墳を築造して埋葬し、生成神的神格と同一視される存在として顕示することがはじめられた。奈良盆地東南部では古墳前期の大規模倉庫群が未検出であるから、食糧給付体制のないままに大型前方後円墳の築造は完遂された。その背景には、盟主的首長と地域社会との間に強い紐帯の存在が窺われる（豊岡 2021）。古墳被葬者が地域社会の再生産に関与する存在と観念されたことも、こうした古墳築造の実情を参考にすることで理解が深まる。

古墳前～中期の亡き首長の身体は埋葬諸施設で手厚く保護される一方で、赤色顔料で幾重にも覆われ、棺外からは鏡面を向けられ、あるいは革盾を裏面副葬され、埋葬施設に呪縛されて、外界から遮断された。こうしたことから、亡き首長は神聖ではあるが邪悪に変わることもある2面性をもつ存在として、同時代のひとに観念されていたとの仮説を提起した。本仮説が正しいときには、わたしたちは古墳前～中期の大型前方後円墳を核とする葬祭の神聖な面のみをみてきたことになる。つまるところ、小稿仮説は既存学説と趣を異にするから、顕学による検証をまつことにしたい。（2023.10.12提出）

補記

筆者は退職で生活を一新し、考古学とはやや疎遠になった。ただし、管理業務に感けていた50代、手のすいた折に考えたものの発表はしておきたいと考えて、この5年間にいくつかの学会・機関のお世話になった。その最後に、現場主任を務めた桜井茶白山古墳に関する手稿を、『纏向学研究』第12号に掲載していただいた。骨子は、2015年榎考研友史会60周年記念講演「3基の柄鏡形大型前方後円墳」要旨であるが、章立てを変更して呪縛儀礼関係の資料・分析を補充した。それによって、桜井茶白山古墳調査の際に感じた大型前方後円墳葬祭の異様さは、大まかに説明することができたと思う。

謝辞

起稿にあたって、豊中市教育委員会には御獅子塚古墳出土盾の実見ならびに写真転載をご許可いただいた。また京都大学考古学研究室には石山古墳出土盾資料の転載をご許可いただいた。豊中市立郷土資料館ならびに中村美琴女史・陣内高志氏、京都大学考古学研究室ならびに吉井秀夫教授のご厚情に拝謝します。

最後になりましたが、小稿公刊にご尽力いただいた寺沢薫所長、および編集の労を執っていただいた丹羽恵二氏・立石千紘女史をはじめとする纏向学研究センターの諸氏に、記して深謝申し上げます。

【註記】

- 1) 小稿では竪穴式石室と統一表記する。例えば桜井茶白山古墳竪穴式石室では、壁体構築は3工程に分かれていた。墓壙下部に石室基底を造り、棺身を置いて周囲に壁体第1工程を築いた。同工程壁体上面は埋葬儀礼の場の一部となり、墓道（作業道）も第1工程壁体上に開く。木棺蓋設置後の第2工程壁体上面では、棺蓋上に鏡の副葬がおこなわれたと復原される。このように最終的には石槨になるにしても、葬祭時の形状・空間利用は槨と単純化しがたい。＜参考文献 和田晴吾1989＞
- 2) イラク・アッシュール遺跡、シリア・ウガリット遺跡出土粘土板に記された物語には、死・邪悪な存在から身を護るのに赤土を身に塗る儀礼をみる。＜参考文献 Theodor Herzl Gaster 1952 “Oldest Stories in the World” The Viking Press／矢島文夫訳 1973 『世界最古の物語 バビロニア・ハッティ・カナアン』社会思想社 p.88・p.291＞
- 3) 岡山県鶴山丸山古墳の鏡の出土状況の理解には混乱がある。永山卯三郎の聞き取りには、棺側出土鏡13面は「棺身の外側に紋様ある面を外に向けて立てありし」と記す。梅原は棺南端の東・西に残っていた鏡の出土状態から、棺側出土鏡すべてが鏡面を外に向けていたとした。石室内には泥土が約30cm堆積しており、同石室は雨水等で深く水没した時期があった。仮に、棺蓋東西斜面に鏡面を下にしておかれた鏡が、水中に滑り落ちたとする。確率上は多くが鏡背を壁体に向ける一方で、水中で反転するものもありえる。梅原が観察した棺南端の東・西の鏡の出土状態のばらつきは、そうした結果と考える方が理解しやすい。
- 石井啓・山内雄奨は、備前市埋蔵文化財管理センターの展示に丸山古墳の石棺を復原し、棺側出土鏡を棺蓋上副葬品として鏡背を上にしたが、その理由は文章化されていない。＜参考文献 山内雄奨2020「埋蔵文化財管理センター企画展「丸山古墳の主体部～石棺の中で眠る～」」『備前市文化財レポート2019年報』備前市教委文化振興課＞
- 4) 大成洞古墳群13号墳の巴形銅器について、報告は盾とし、井上主税は鞆の可能性も考慮する。槨内副葬品という点では共通し、槨蓋上遺物との認識はないから、槨外裏面

副葬の革盾とは異なる。なお、井上主税氏からは、大成洞古墳群巴形銅器について解説いただいた。記して感謝を申し上げる。＜参考文献 慶星大学校博物館編 2000 『金海大成洞古墳群』 I・II 慶星大学校博物館、井上主税 2014 『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』 学生社＞

【参考・引用文献】 (中国文献は著・編者名日本語発音順)

青木さやか 2003 「古墳出土革盾の構造とその変遷」『古文化談叢』49 九州古文化研究会

池澤優 2003 「中国の死生観(古代・中世篇) - 中国古代・中世における“死者性”の転倒 - 『死および死者崇拜・死者儀礼の宗教的意義に関する比較文化的・統合的研究』平成12～14年度科学研究報告書 pp.153-319

今村与志雄 編訳 1980 『酉陽雜俎』(東洋文庫382) 平凡社

内田純子 2013 「西北岡1001号大墓出土彫花骨器」『中央研究院歴史言語研究所週刊』84 中央研究院歴史言語研究所

大場磐雄 1950 「考古学上から見た我が上代人の他界観念」『宗教研究』123号 日本宗教学会 pp.12-18

岡田莊司 1989 「大嘗・新嘗の淵源—倭の屯田を訪ねて」『大和美』77号 大神神社

岡田英弘 1977 『倭国』中央公論社

折口信夫 1930 「大嘗祭の本義」『古代研究』民俗学篇2 大岡山書店

京都大学文学部考古学研究所 1993 『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館 思文閣

許慎前漢 和帝 永元12年 『説文解字』

小林行雄 1949 「黄泉戸喫」『考古学集刊』2 東京考古学会

小林行雄 1962b 「革の盾」『古代の技術』塙書房

近藤喬一 2004 「中国古代における鏡の副葬—漆面罩を中心にして」『アジアの歴史と文化』第8輯 山口大学アジア歴史・文化研究会 p.16-17

佐原真 1976 「弥生土器」『日本の美術』10 至文堂

白川静 1972 『甲骨文の世界』東洋文庫204 平凡社

白川静 1984 『字統』平凡社

白石太一郎 1975 「ことどわたし考」『橿原考古学研究所創立35周年記念論集』吉川弘文館

石璋如 1964 「安陽考古概観」『史林』47 史学研究会

高橋健自 1922 『古墳と上代文化』国史講習会

高橋護 1986 「組帯紋の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究紀要』第5号 岡山県立博物館

辰己和弘 2011 『世界へ翔る船』新泉社 pp.30-31、p.166、p.241、p.338

千賀久 2000 「大和天神山古墳の鏡群」『古代「おおやまと」を探る』学生社 pp.232-233

豊岡卓之 2003 「特殊器台と円筒埴輪」『考古学論攷』26 橿考研

豊岡卓之 2008 『奈良盆地の前方後円墳と初期王権の考古学的研究』(私家版/国立国会図書館所蔵) p.294

豊岡卓之 2021 「古代磯城と王墓」『博古研究』第61号 博古研究会

豊岡卓之 2023 「大倭氏に関する研究ノート」『橿原考古学研

究所創立85周年論集』八木書店

西村俊範 2012 「漢鏡の二・三の問題について」『人間文化研究』29 京都学園大学人間文化学会

橋本達也 1999 「盾の系譜」『国家形成の考古学』大阪大学考古学研究室

東森市良 1971 「九重式土器について」『考古学雑誌』57 巻1号 日本考古学会

平井直房 1977 「出雲国造の祭事・葬送・禁忌」『宗教研究』231号 p.13 日本宗教学会

広瀬和雄 2003 『前方後円墳国家』角川書店

広瀬和雄 2009 「古墳時代像再構築のための考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第150集 国立歴史民俗博物館

藤井康隆 2019 「“鬼道”東漸」『第六届历史与考古青年学者交流会论文集』安徽师范大学历史与社会学院・南京大学六朝研究所

穂積裕昌 2012 『古墳時代の葬送と祭祀』雄山閣pp.215-219

前野直彬 編訳 1963 『唐代伝奇集1』(東洋文庫2) 平凡社

三保忠夫 1997 「中国古代簡牘資料における量詞の考察」『人文・社会科学』31 鳥根大学教育学部 p.14

余英時 1965 “Life and immortality in the mind of Han China”, Harvard Journal of Asiatic Studies 2

余英時 1983 「中国古代死後世界観の演変」『明報』18-9

余英時 1987 “O soul, come back: a study in the changing conceptions of the soul and afterlife in pre-Buddhist China”, Harvard Journal of Asiatic Studies 47-2

吉井秀夫 2002 「『朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団』『考古学研究』第49巻第3号 考古学研究会 p.40

吉本隆明 1968 『共同幻想論』河出書房新社 pp.112-113

和田晴吾 1989 「墓制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元6 講談社 pp.112-113、p.116

和田晴吾 2022 『室宮山古墳の歴史的意味』御所市

Karl Marx 1844 (藤野渉 訳 1963 『経済学・哲学手稿』 p.150 大月書店

報告書 (中国文献は著・編者名日本語発音順)

伊藤隆三・塚田一成 1992 『谷内21号墳』小矢部市教委

今尾文昭 1983 「市尾今田古墳群」『奈良県遺跡調査概報 1981年度』橿考研

内蒙古自治区博物館文物工作隊 1978 『和林格爾漢墓壁画』文物出版社

梅原末治 1912 「河内小山村発見の石棺及び遺物に就きて」『歴史地理』19巻6号 日本歴史地理学会

梅原末治 1920 「河内小山城山古墳調査報告書」『人類学雑誌』35巻8・9・10号 日本考古学会

梅原末治 1921 「河内小山城山古墳調査報告補正」『人類学雑誌』36巻4・5・6・7号 日本考古学会

梅原末治 1938 「備前和気郡鶴山丸山古墳」『日本古文化研究所報告』9 日本古文化研究所

大浦元彦 1986 「『出雲国造神賀詞』奏上儀礼の成立」『史苑』第45巻2号 立教大学史学会

大道弘雄 1912 「河内小山村発見の大石棺」『考古学雑誌』2

卷9号 日本考古学会
 郭宝均 1936 「濬県辛村古残墓之清理」 『田野考古学報告』 1 商務印書館
 郭宝均 1951 「1950年春殷墟発掘報告」 『中国考古学報』 第5 冊 中国社会科学院考古研究所
 金関恕 外 2010 『東大寺山古墳の研究』 東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館
 河南省文物考古研究所2010 『曹操墓真相』 科学出版社
 河南省文物考古研究所 周口市文化局 2000 『鹿邑太清宫長子口墓』 中州古籍出版社
 河南省文物保護研究所 2004 『固始侯古堆1号墓』
 川知聰 外 2004 『天潢・宮西遺跡旧河道編 上西原遺跡第2次調査』 香川県埋蔵文化財調査センター
 咸陽市博物館1966 「陝西省咸陽市楊家灣出土大批西漢彩繪陶俑」 『文物』 1966-3 文物出版社
 岸本一宏 外 2010 『史蹟茶すり山古墳』 兵庫県教委
 荊州博物館 1985 「江陵李家台楚墓清理簡報」 『江漢考古』 1985-3 江漢考古編集部
 小林行雄・有光教一・森貞次郎 「一貴山銚子塚古墳の調査報告書」 『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』 第16輯 福岡県教委
 小林行雄 1962a 「狐塚・南天平塚古墳の調査」 『大阪府の文化財』 大阪府
 湖北省荊沙鐵路考古隊 1991 『包山楚墓』 文物出版社
 湖北省博物館 1989 『曾侯乙墓』 文物出版社
 近藤義郎 外 1992 『榑築弥生墳丘墓の研究』 榑築刊行会
 西藤清秀 2019 『島の山古墳-前方部埋葬施設の調査-』 奈良県埋蔵文化財調査報告書第183集 榑考研
 獅子山楚王陵考古発掘隊 1998 「徐州獅子山西漢楚王陵発掘簡報」 『文物』 1998-8 文物出版社
 末永雅雄 外 1991 『盾塚・鞍塚・珠金塚古墳』 由良大和古代文化研究会
 杉本宏 外 1991 『宇治二子山古墳』 宇治市教委
 石璋如 1959 『小屯第一本 遺址の發現與發掘・乙編 殷墟建築遺存』 中央研究院歴史語言研究所
 仙台市教育委員会 『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか』 仙台市教委
 戴春陽 編 1998 『敦煌仏爺廟湾西晋画像磚墓』 文物出版社
 伊達宗泰 1966 「和邇上殿古墳」 『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第23 冊 奈良県教委
 長江流域第2期文物考古工作人員訓練伴班 1976 「湖北江陵鳳凰山西漢墓発掘簡報」 『文物』 1974-6 文物出版社
 中国社会科学院考古研究所 1980 『殷墟婦好墓』 文物出版社
 坪井正五郎 1912 「河内津堂城山古墳の調査」 『人類学雑誌』 28巻7号 東京人類学会
 寺沢薫 外 2011 『東アジアにおける初期都宮および王墓の考古学的研究』 榑考研（平成19～22年度科学研究費補助金基礎研究A／課題番号19202025）

徳田誠志・清喜裕二 1999 「倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業（復旧）箇所の調査」 『書陵部紀要』 第51号 宮内庁書陵部
 豊岡卓之 1996a 「埴輪」 『天理市中山大塚古墳発掘調査報告書』 榑考研
 豊岡卓之 1996b 「出土遺物」 『天理市中山大塚古墳発掘調査報告書 附篇葛本弁天塚古墳』 榑考研
 豊中市 2005 『新修 豊中市史 第4巻 考古』 豊中市
 豊中市教育委員会 1990 『御獅子塚古墳』 豊中市教委
 福尾正彦 1990 「衾田陵の墳丘調査」 『書陵部紀要』 第42号 宮内庁書陵部
 文化部古文書研究室・安徽省阜陽地区博物館阜陽漢簡整理組 1988 「阜陽漢簡《万物》」 『文物』 1988-4 文物出版社
 文物出版社編 2013 『敦煌莫高窟第285窟・供养菩薩・西魏』（中国古代壁画經典高清图系列） 文物出版社
 宝鶏茹家庄西周墓発掘隊 1976 「陝西省宝鶏市茹家庄西周墓発掘簡報」 『文物』 1976-4 文物出版社
 馬俊才・張明立 2009 「新胡庄墓地发掘获重大发现」 『中国文物報』 中国文物報社
 松阪市教育委員会 2005 『三重県松阪市宝塚町・光町所在 史跡宝塚古墳-保存整備事業に伴う宝塚1号墳・宝塚2号墳調査報告』 松阪市教委
 松本洋明・青木勘蒔 2000 『西殿塚古墳・東殿塚古墳』 天理市教委
 森浩一 外 1953 『河内黒姫山古墳の研究』 大阪府教委
 森浩一 外 1954 『和泉黄金塚古墳』 綜芸舎
 柳本照男 外 1987 『撰津豊中大塚古墳』 豊中市教委
 揚州博物館 1987 「揚州平山養殖場漢墓清理簡報」 『文物』 1987-1 文物出版社
 李書謙 2011 『虢国盾牌発現保護記 叩開虢国之門』 陝西省人民出版社

図出典（記載文献は参考・引用文献、報告書を参照）

- 図1 寺沢薫 外 2011図4に加筆・転載
- 図2 寺沢薫 外 2011から作図
- 図3 豊中市教育委員会 1990 「全貌をあらわした盾（東側）」に加筆・転載／豊中市教育委員会許可済
- 図4 杉本宏 外 1991図49を転載
- 図5 京都大学文学部博物館 1993図版55・137-2158・159に加筆・転載／京都大学考古学研究室許可済
- 図6 仙台市教育委員会 2011p.637第9図を転載
- 図7 豊中市 2005 図248から筆者作成
- 図8 伊藤・塚田 199 2 図9 右上を転載
- 図9 杉本宏 外 1991図90を転載
- 図10 河南省文物考古研究所 201011に加筆・転載
- 図11 梅原末治 1920を製図・転載
- 図12 筆者作図

纏向遺跡第 195 次調査 SK38 土坑から出土した
植物および昆虫類について

松 田 和 花
佐々木 香 奈
梅 原 若 羽
江 崎 日 菜
宮 路 淳 子
初 宿 成 彦

目次

I. はじめに	93
II. 纏向遺跡第195次調査SK38の調査	93
III. 土壌水洗および微細遺物採集の方法	94
IV. 分析結果	94
V. おわりに	104

論文要旨

2018年に行われた第195次調査において検出されたSK38は、祭祀遺物が多数出土している古墳時代前期前半（3世紀後半・布留0式期）の土坑である。奈良女子大学ではこの土坑から層位ごとに採取した土壌についてフローテーションと水洗篩別を実施し、多くの動物遺存体を検出した。植物種子からは当時の周辺環境に関する情報が得られた。昆虫にはチャバネゴキブリが含まれ、古墳時代の日本列島にすでにチャバネゴキブリが生息していたことを明らかにした。池上曽根遺跡（大阪府和泉市・泉大津市）の松之浜曾根線に伴う発掘調査報告書（大阪府教育委員会1990）においてもSD15（自然流路）の古墳時代中期後半頃（5世紀後半）とみられる土層からチャバネゴキブリが出土しており、古墳時代の纏向遺跡と池上曽根遺跡という、日本列島外を含む他地域との交流が活発であったことが想定される古墳時代の2遺跡で発見されたという発見は重要である。

松田 和花（まつだ のどか）

奈良女子大学文学部人文社会学科
古代文化学コース

佐々木 香奈（ささき かな）

奈良女子大学文学部人文社会学科
古代文化学コース

梅原 若羽（うめはら わかば）

奈良女子大学文学部人文社会学科
歴史学コース

江崎 日菜（えざき ひな）

奈良女子大学文学部人文社会学科
歴史学コース

宮路 淳子（みやじ あつこ）

奈良女子大学大学院人文科学系教授

初宿 成彦（しやけ しげひこ）

大阪市立自然史博物館外来研究員
追手門学院大学非常勤講師

纏向遺跡第195次調査 SK38土坑から出土した植物および昆虫類について

松田和花・佐々木 香奈・梅原若羽・江崎日菜・宮路淳子・初宿成彦

I. はじめに

奈良女子大学は桜井市纏向学研究センターと協力し、纏向遺跡（奈良県桜井市）の土壌調査を実施してきた。2018年に行われた第195次調査において検出されたSK38は、祭祀遺物が多数出土している古墳時代前期前半（3世紀後半・布留0式期）の土坑である。奈良女子大学ではこの土坑から層位ごとに採取した土壌についてフローテーションと水洗篩別を実施し、多くの動・植物遺存体を検出した。

本稿では、分析で得られた植物遺体、大阪市立自然史博物館との共同研究の結果発見された昆虫類について報告する。

II. 纏向遺跡第195次調査 SK38の調査

纏向道跡は奈良盆地の東南部、桜井市の北西部の継向川扇状地上に位置する道跡で、その範囲は東西約2km、南北約1.5kmに及ぶ（図1）。3世紀代の日本列島における極めて重要な集落が存在していたと考えられている。

第195次調査（奈良県桜井市）は2018年に宅地造成に

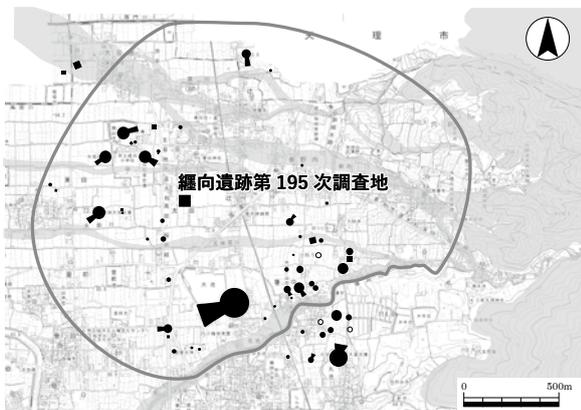


図1 纏向遺跡の範囲と纏向遺跡調査地 (S = 1/40000)

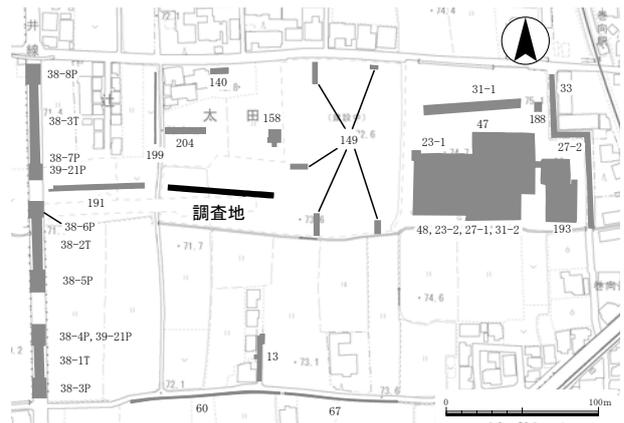


図2 纏向遺跡第195次調査区位置図 (S = 1/5000)



写真1 纏向遺跡第195次調査区全景

先立って実施された（図2、写真1）。調査地は遺跡のほぼ中央に位置する太田微高地上に位置する。近年まで耕作地として使用されていたが、周辺では宅地開発が進行し本調査地の近隣でも過去に発掘調査が行われている。

調査区では、全面で多数の溝・土坑・柱穴などの遺構が確認された。出土遺物は庄内式期から布留式期の土器が大半を占めており、古墳時代中期以降の土器はほとんど認められなかったため、大部分の遺構が庄内式期から布留式期のものと考えられている（西村 2019）。

調査区の中央部で検出された深さ約1.34mの土坑であるSK38は、祭祀遺物を多数含む古墳時代前期前半（3

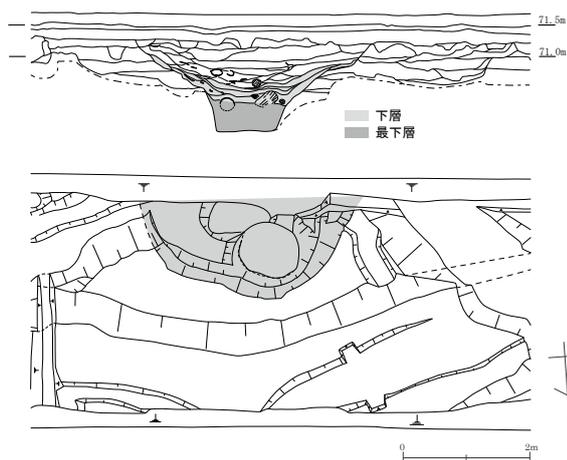


図3 SK38 平面図・断面図 (S = 1/120)



写真2 SK38 遺物出土状況

世紀後半・布留0式期)の土坑である(図3、写真2)。中層からはほぼ完形の甕が多数出土し、有段高杯や東海系S字甕のミニチュア品、近江系の甕も出土した。この他にも、舟形木製品やガラス玉・銅鏃が各一点ずつ出土している。

Ⅲ. 土壌水洗および微細遺物採集の方法

今回の分析では、SK38の中層・下層・最下層の層位ごとに土壌を水洗し、その結果採集した種子、昆虫類の分類、同定を行った。

土壌水洗に用いた用具は、ふるい(20cm径、5・1・0.5mm目)、ひしゃく(1ℓ)、目盛り付きバケツ(17ℓ)である。微細遺物の回収にはフローテーション法と水洗篩別法を用いた。

まず、乾燥した遺跡の土壌を土嚢袋のまま水につけて柔らかくした。ひしゃくに約1ℓの土壌と約9ℓの水をバケツに加えその後、水をかけ流し、水よりも比重の軽

い試料の収集、フローテーション法を先行して行った。

続いてその他の試料を目の粗いものが上になるように重ねたところへ土をひしゃくで注ぎ入れる。土壌水洗に用いた用具は、ふるい(20cm径、5・1・0.5mm目)、ひしゃく(1ℓ)、目盛り付きバケツ(17ℓ)である。篩は大きい順に5mm・1mm・0.5mmと重ねてふるい分けを行い、微細遺物を種類ごと選り分けて回収した。観察には拡大鏡や顕微鏡(Nikon、WJ T デジタルマイクロスコープ DIM-03)、撮影用カメラ(OLYMPUS Tough TG-5)やピンセットを用い分類した。

Ⅳ. 分析結果

1. 植物遺存体

(1) 植物遺存体は、奈良教育大学 金原正明氏、一般財団法人 文化財科学研究センター 金原美奈子氏の指導のもと種子同定を実施した。以下に出土傾向を記す。

アサ科

アサ(写真3)：

概要(牧野 2017/655pp.)

学名：*Cannabis sativa* L.

分布：南アジアや中央アジア原産か。古代より日本に入る。

生育環境：畑で栽培。

備考：一年生草本。開花時期夏。茎皮の繊維を衣類にしたり麻糸にしたりする。

出土状況

中層フローテーション・1mm・0.5mm：++++

下層フローテーション・1mm・0.5mm：++++

最下層フローテーション：++

特記事項

黒・薄茶・黒褐色・焦げ茶・茶。

腐食層から出土の個体はほぼ完形であった。

カナムグラ(写真4-1、4-2)：

概要(北村・村田 1994a/345pp.)

学名：*Humulus scandens* (Lour.) Merr.

H.japonicus Sieb.et Zucc.

分布：温帯－亜熱帯。北海道・本州・四国・九州・
沖縄・台湾・中国。

生育環境：野原・道ばた。

備考：つる性一年草。開花時期 9－10 月頃。

出土状況

中層フローテーション・5 mm・1 mm：+++

下層フローテーション・1 mm・0.5 mm：++++

最下層フローテーション・1 mm：++

特記事項

黒・黒褐色・黒に近い灰色・灰色・薄茶。

層位・ザルの別によらず破損状態でみつかるといわれる
が主であった。

数量も多く、同一作業中に 51 個の破片がみられた
例もあった。セパレーション作業を通じて頻繁に
現れた種子の一つであった。

イネ科

イネ (写真 5)：

概要 (三橋 1998/592pp.)

学名：*Oryza sativa* L.

分布：アジアの暖温帯から熱帯に分布する野生種
Oryza perennis から起源したといわれる
栽培種。

生育環境：世界の温・熱帯にかけて広く栽培。

備考：一年草。日本には古代に渡来した。

出土状況

中層フローテーション・1 mm：+++

下層フローテーション・1 mm：+++

最下層フローテーション・5 mm・1 mm：+++

特記事項

黒・茶・焦げ茶。

炭化した黒色のものが多くみられる (写真 6)。

当該種が出土している土嚢袋それぞれからは、1
～5 個体が見つかっている。

イネ科不明種子 (写真 7)：

出土状況

中層+

特記事項

アワ・ヒエ・キビと思われる炭化した種子が一点

見つかった。大きさはヒエに近いが、炭化して
おり保存状態が悪いため同定には至らなかった。

ウリ科

ヒョウタン (写真 8)：

概要 (牧野 1996/493pp. 朝日新聞社 1979/720pp.)

学名：*Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. var.
gourda (Ser.) H.Hara

分布：世界中で栽培。アフリカ、アジアの熱帯に
原産か。

生育環境：人家に栽培。

備考：一年生のつる植物。開花時期夏。酒器など
をつくる。日本では弥生時代の前期にす
でに栽培開始、土師、須恵文化期にかけ盛ん
になったとみられる。

出土状況

中層フローテーション・1 mm：+++

下層フローテーション・5 mm・1 mm：++++

最下層フローテーション：+

特記事項

黒色を帯びたもの・茶・茶褐色・薄茶・焦げ茶・
灰色・また縞模様の個体もみられた。

各土嚢袋からの出土数はまちまちであるが、セ
パレーション作業を通じて頻繁に現れた種子の
一つであった。

ウリ類 (写真 9)：

出土状況

中層フローテーション・1 mm・0.5 mm：++

下層フローテーション・1 mm・0.5 mm：++++

最下層フローテーション・5 mm・1 mm：++++

特記事項

茶・薄茶・焦げ茶・灰色・また縞模様の個体も
みられた。

各土嚢袋からの出土数はまちまちであるが、今
年度のセパレーション作業を通じて頻繁に現れた
種子の一つであった。種子のほかヘタが一点出
土した (写真 10)。

カヤツリグサ科

カヤツリグサ (写真11) :

概要 (長田1993/430pp.)

学名 : *Cyperus microiria* STEUD.

分布 : -

生育環境 : 田畑・道ばた。

備考 : 一年草。開花時期夏-秋。

出土状況

下層フローテーション・1mm : ++

キク科

オナモミ (写真12) :

概要 (北村・村田・堀 1994/89pp.)

学名 : *Xanthium Strumarium* L.

分布 : 温帯-熱帯。日本全土・アジア・ヨーロッパ。北アメリカにも帰化。

生育環境 : 低地の道ばた。

備考 : 一年草 開花時期 8-10月頃。

日本には農耕文化とともに大陸から入りこんだとみられる。

出土状況

中層 5mm : ++

下層フローテーション・1mm : ++

特記事項

黒・薄茶・焦げ茶・茶。

バラ科

ウメ (写真13) :

概要 (北村・村田 1994c/ 6 pp.)

学名 : *Prunus Mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.

Armeniaca Mume Siebold

分布 : 中国中部原産。日本には西暦 700 年以前に伝来、広く栽培。

生育環境 : 庭に栽培、時に野生化。

備考 : 落葉小高木。開花時期 2-3月。

出土状況

中層フローテーション・1mm : ++

下層フローテーション・5mm : ++

最下層フローテーション・5mm : ++++

特記事項

茶・薄茶・焦げ茶・黒・灰色。

また一部白色化した茶色の個体が発見された。

モモ (写真14) :

概要 (北村・村田 1994c/ 7-8 pp.)

学名 : *Prunus Persica* Batsch *Persica vulgaris* Miller, *Amygdalus Persica* L.

分布 : 温帯。中国北部原産。

特記事項

古代から果実をとるため広く栽培され、野生化しているところがある。

生育環境 : 畑に栽培。

備考 : 落葉小高木。開花時期 4月初め。

出土状況

中層フローテーション・5mm : +++

下層フローテーション・5mm : +++

最下層フローテーション・5mm : +

特記事項

黒・薄茶・焦げ茶・茶・茶褐色。

全長が20~25mmほどの小さめの種子が出土している。今回動物種別の特定が叶わなかったが、噛み跡がある個体もみられた (写真15)。

スモモ (写真16) :

概要 (北村・村田 1994c/ 7 pp.)

学名 : *Prunus salicina* Lindley *P.triflora* Roxb.

分布 : 中国原産。日本では果実を食用のため栽培。

生育環境 : 畑に栽培。

備考 : 落葉小高木。開花時期 4月。果実は 6-7月に熟す。

日本の洪積世・鮮新世から散見的に核の遺体が報告。現在では野生はない。

出土状況

下層フローテーション : +

最下層 5mm : ++

バラ科種別不明 (写真17) :

出土状況

中層フローテーション : +

特記事項

茶および焦げ茶～茶褐色。

今回の作業では、中層から 2 個体のみ発見された。

サクラ属サクラ節 (写真18) :

出土状況

下層 5 mm : +

特記事項

薄茶色。

今回の作業では、下層から 1 個体のみ発見された。

クワ科

カジノキ (写真19) :

概要 (北村・村田 1994c/243-244pp.)

学名 : *Broussonetia papyrifera* (L.) l'Hérit. Ex
Vent. *Morus papyrifera* L.

分布 : 暖帯、亜熱帯、熱帯。中国中南部・台湾・
ベトナム・タイ・ミャンマー・インド・マ
レーシア・太平洋の諸島。

生育環境 : 庭に栽培、時に野生化。

備考 : 落葉高木。開花時期 5 月。平安時代には七
夕には葉の裏に字を書いた。

日本でも古くは樹皮から紙を作り、また薬
用にしたが現在では利用しない。

出土状況

中層フローテーション・5 mm・1 mm・0.5mm : + + +

下層フローテーション・1 mm・0.5mm : + + + +

最下層フローテーション・5 mm・0.5mm : +

特記事項

黒・薄茶・黒褐色・焦げ茶・茶・黄土色・灰色・
茶褐色。

各土嚢袋からの出土数はまちまちであるが、セパ
レーション作業を通じて頻繁に現れた種子の一つ
であった。

シソ科

エゴマ (写真20) :

概要 (三橋 1998/457pp.)

学名 : *Perilla frutescens* (L.) Britton. var. *japonica*
Hara

分布 : 東南アジア (インド、中国中南部) 原産。

生育環境 : 日本では古くから栽培、また野生化。

備考 : 一年草。開花時期 8 - 10 月。エゴマ油は乾
性油で、日本には中国から渡来し、天平の
頃から菜種油が普及するまで灯火用に使わ
れた可能性がある。

出土状況

下層 1 mm : +

特記事項

茶・薄茶・焦げ茶・黒・灰色。

シソ属 (写真21) :

出土状況

中層 1 mm : +

下層フローテーション・1 mm : +

キラソウ属 (写真22) :

出土状況

中層 5 mm・1 mm : +

最下層 : +

特記事項

体は灰色・5 mm ほど。

セリ科

ヤブジラミ (写真23) :

概要 (北村・村田 1994a/10pp.)

学名 : *Torilis japonica* (Houtt.) DC.

分布 : 暖帯、温帯。北海道・本州・四国・九州・
沖縄・台湾・東アジア・ヒマラヤ・シベリ
ア・コーカサス・アフガニスタン・ヨーロッ
パ・北アフリカ。

生育環境 : 道ばた。

備考 : 越年草。開花時期 6 - 7 月。

出土状況

下層フローテーション : + +

特記事項

茶色。

今回の作業では、腐食層から 2 個体のみ発見された。

ブドウ科

ブドウ属 (写真24) :

出土状況

下層フローテーション・1mm : +

特記事項

黒・茶色混じる黒。

ミカン科

カラスザンショウ (写真25) :

概要 (北村・村田 1994b/322-323pp.)

学名 : *Fagara ailanthoides* (Sieb. et Zucc.) Engler

Zanthoxylon ailanthoides Sieb. et Zucc.,

Zemarginellum Miquel, *Fagara boninsimae*

Koidzumi,

Zanthoxylon inerme (Rehder et Wilson)

Koidzumi

分布 : 温帯、暖帯。

本州・四国・九州・韓国・中国・沖縄・台

湾・小笠原・フィリピン。

生育環境 : 山中。

備考 : 落葉高木。開花時期7-8月。

出土状況

中層フローテーション・1mm : ++

下層フローテーション・1mm・0.5mm : +++

最下層 : +

特記事項

茶・薄茶・焦げ茶・黒。

各土嚢袋からの出土数はまちまちであった。

ムクロジ科

ムクロジ (写真26) :

概要 (北村・村田 1994b/283pp.)

学名 : *Sapindus Mukorossi* Gaertn. *S. abruptus* Lour.

分布 : 暖帯、亜熱帯。本州 (中部以西)・四国・九州・

済州島・沖縄・台湾・中国・ネパール・イ

ンド。

生育環境 : -

備考 : 落葉高木。開花時期6月。種子の遺体が日

本の洪積世から現世まで散見的に報告される。

出土状況

下層5mm : +

特記事項

黒色を帯びた焦げ茶。

今回の作業では、腐食層から1個体 (破損) のみ
発見された。

クマノミズキ (写真27) :

概要 (北村・村田 1994b/197pp.)

学名 : *Cornus macrophylla* Wallich *C. crispula*

Hance, *C. brachypoda* C. A. Mayer, *C.*

taiwanensis Kanehira

分布 : 温帯、暖帯。本州・四国・九州・朝鮮・台

湾・中国・ヒマラヤ。

生育環境 : 山地。

備考 : 落葉高木。開花時期6-7月。

出土状況

最下層フローテーション : +

下層1mm : +

タデ属 (写真28) :

出土状況

中層1mm?・0.5mm : ++

下層フローテーション・1mm : ++

最下層1mm : ++

スゲ属 (写真29) :

出土状況

中層フローテーション5mm・1mm・0.5mm : ++++

下層フローテーション・1mm・0.5mm : ++++

最下層フローテーション : +

スイカズラ科

ニワトコ :

概要 (北村・村田 1994b/36-37pp.)

学名 : *Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana*

(Miquel) Hara *S. Sieboldiana* (Miquel)

Schwer.

分布 : 暖帯、温帯。奄美大島・九州・四国・本州・

済州島・朝鮮南部。

生育環境 : 山野。

備考：落葉低木。開花時期 4 - 5 月。

出土状況

下層フローテーション・5mm：+

サンショウ属：

出土状況

中層 1mm：+

下層 1mm：+

最下層：+

センダン（写真30）：

概要（北村・村田 1994b/307-308pp.）

学名：Melia azedarach L. var. subtripinnata Miquel

M. japonica G. Don, M. Azedarach var.

japonica (G. Don) Makino

分布：暖帯。沖縄・九州・四国・台湾・中国・ヒマラヤ。

生育環境：海辺の山地。

備考：落葉高木。しばしば人家の近くに植えられる。開花時期 5 - 6 月。

果実や葉の遺体が日本の鮮新世から洪積世、現世まで近畿地方から報告されているが、現在は本州には栽培する。

出土状況

下層 1mm：+

ムクノキ：

概要（北村・村田 1994c/255-256pp.）

学名：Aphananthe aspera (Thunb.) Planchon

Prunus aspera Thunberg,

Homoioceltis aspera (Thunb.) Blume

分布：暖帯、亜熱帯。本州（関東以西）・四国・九州・朝鮮・沖縄（まれ）・台湾・中国（山東以南）。

生育環境：山地に生えるが、社寺の境内や道路のふちにきわめて普通である。

備考：落葉高木。開花時期 5 月。

材は器具、機械、建築、船舶、薪炭に利用。葉は骨・角細工を磨くのに利用、果実は甘い。ムクドリなど人家の近くに棲む鳥がよく食べに集まるため、種子が人家近くに広

く散布される。

出土状況

下層フローテーション：+

カエデ属（写真31）：

出土状況

下層フローテーション：+

ヤブツバキ：

概要（堀田他 1993/198pp.）

学名：Camellia japonica L. Var. japonica

分布：九州から本州北部。

生育環境：-

備考：ツバキの野生種。

出土状況

下層 5mm：+

特記事項

果皮が一点出土した（写真32）。

その他

コナラ属幼果？（写真33）：

出土状況

下層フローテーション：+

特記事項

黒。

今回の作業では、下層から 1 個体（完形）のみ発見された。

中層

アサ・カナムグラ・イネ・イネ科不明種子・ヒヨウタン・ウリ類・カヤツリグサ・オナモミ・ウメ・モモ・バラ科種別不明・カジノキ・エゴマ・キランソウ属・タデ属・スゲ属・サンショウ属・カラスザンショウ

下層

アサ・カナムグラ・イネ・ヒヨウタン・ウリ類・カヤツリグサ・オナモミ・ウメ・モモ・スモモ・サクラ属サクラ節・カジノキ・エゴマ・シソ属・カタバミ属・クマノミズキ・タデ属・スゲ属・センダン・ムクノキ・ヤブジラミ・ブドウ属・サンショウ属・カラスザンショウ・ム

クロジ・コナラ属幼果・カエデ属・ヤブツバキ・キランソウ属

最下層

アサ・カナムグラ・イネ・ヒョウタン・ウリ類・ウメ・モモ・スモモ・カジノキ

(2) 考察

本土坑からはスゲ属とカナムグラ等の草本類の種子が非常に多く出土した。金原正明氏の纏向古墳群周辺の花粉分析調査では庄内式期にはイネ科を中心とした草本花粉の占める割合が多く、集落域に樹木の少ない人的環境が広がっていた。しかし、纏向石塚古墳造営後早期にエノキ属ムクノキ、ミズキ属、スギによって二次林化しており、布留式期古相の時期には人の立ち入らない空間だったことが推定されている（金原2013/60-61pp.）。195次調査の調査区である太田微高地上は纏向古墳周辺とは異なり、古墳時代前期前半には草本植物の広がる環境であった可能性を今回の調査によって提示することができた。また、以上のような草本植物の出土は下層・中層では多く見つかるのに対し、最下層では全体を通して数点しか見つかっていない。最下層の形成以降に草本植物が生えるようになったことが考えられる。

本土坑からはモモ、ウリ類、イネ、アサの種子のような食用とされる種子も出土した。纏向遺跡出土の食用植物の遺存体について金原正明氏は166・168次の調査においてこれらの種子はほぼ完形で出土していることから、全体的に食用とされていた形跡がないことを述べているが（金原2013/48pp.）、SK38から出土した種子片も同様の特徴がみられた。同氏は庄内3期式、3世紀中ごろの遺構のSK3001から出土したイネについて炭化米と朮が検出されていると述べるが（金原2013/48pp.）SK38から出土したイネも同様の傾向が見られた。また、下層からは皮が残った状態と思われるウメの種子が出土している。同定を担当した金原美奈子氏は、皮がついたまま土坑に入れられた可能性があるとして述べていた。本土坑から出土した食用植物は、食される前に土坑に埋まったことが考えられる。

バラ科植物であるモモ・ウメ・スモモの出土が顕著であったことも本土坑の特徴の一つである。層位別にみる

と、下層（ウメ完形6点、破片3点/モモ完形20点、半径6点、破片18点/スモモ完形8点、半形2点）、中層（ウメ破片2点/モモ完形5点、破片17点/スモモ破片1点）、最下層（ウメ完形13点、破片11点/モモ完形2点、半形1点、破片1点/スモモ完形3点、破片5点）、である。この度の計測によって、モモは下層から、ウメは下層・最下層から、スモモは最下層からより多く出土する傾向が読み取れる。このことから層位によって利用される種子が変化することが考えられる。

今回の調査では層位別の種子の出土個数の比較まで至らなかったため、今後の調査による、さらなる情報の精査が期待される。

2. 昆虫化石

ゴキブリ目

チャバネゴキブリ科

チャバネゴキブリ

Blattella germanica Linnaeus,1767

産出層準：腐食層

産出部位：前胸背板（i-24 [写真34]）

分布：世界中に広く分布し、日本でもほぼ全国に分布する。
生息環境：世界共通の家屋害虫で、全国の都市の飲食店、旅舎、ビルディング、公団住宅等に繁殖して被害を与えている。
付記：前胸背板は本来はやや蒲鋒型の凸形状を呈しているが、化石標本は完全に平圧されていること、また表面の毛がすべて抜け落ちており、近年の紛れ込み等ではなく、弥生時代の地層から産出したものと考えている。

半翅目

ツチカメムシ科

コツチカメムシ

Macroscythus fraterculus Horvath,1919

産出層準：腐食層

産出部位：小楯板（i-64 [写真35] ; i-68.）

同定について：ナミツチカメムシとは点刻の状態が異なり、本種とした。

分布：北海道、本州、対馬、中国

生息環境：海岸や河川敷といった開けた環境で見られるが多い。

ヒメツチカメムシ

Geotomus pygmaeus (Dallas, 1851)

産出層準：腐食層

産出部位：前胸背板 (i-69 [写真36])

同定について：同サイズの他のツチカメムシ類とは点刻の状態や形状が異なり、本種とした。

分布：本州、四国、アムール

生息環境：平地から低山地の主に草原環境にすむ。

生態：イネ科植物、キク科植物などの根ぎわや地中で生活し、成虫で越冬する。夜間灯火に多くの個体が飛来する。

鞘翅目

オサムシ科

オサムシ類の一種

Carabiinae, gen. et sp. indet.

産出層準：腐食層

産出部位：上翅 [破片] (i-26 [写真37])

生態：林地にすむものが多い。

コヒメヒョウタンゴミムシ

Clivina vulgivaga Boheman, 1858

産出層準：腐食層

産出部位：右上翅 [基半] 部分 (i-49 [写真38])

分布：北海道～九州、中国、台湾、東洋区

生息環境：琵琶湖や淀川の湿地に生息する。

生態：捕食性。

ヨツモンコミズギワゴミムシ

Tachyura (Tachyura) laetifica (Bates, 1873)

産出層準：腐食層

産出部位：右上翅 [全] (i-71 [写真39])

同定について：近縁種は多数あるが、上翅にある褐色の斑紋によって本種に同定することができた。

分布：北海道～九州、八丈島、南西諸島 (奄美以北)、韓国、中国

生息環境：平地～山地の水辺環境

生態：成虫は 4～10 月に出現し、河原などに生息する。

石の下などで発見されることが多い。

キアシヌレチゴミムシ

Archipatrobus flavipes flavipes (Motschulsky, 1864)

産出層準：腐食層

産出部位：前胸背板 [部分] (i-102 [写真40] ; i-35)

左上翅 [ほぼ全] (i-92) ; 上翅 [全] (i-102)

分布：北海道～九州、佐渡、壱岐、韓国、中国

生息環境：主に平地の川原・水田の水辺や湿地などに見られる。

生態：地表にいる小動物等を捕食する。

オオゴミムシ

Lesticus (Tripligenius) magunus (Motschulsky, 1860)

産出層準：腐食層・上層

産出部位：左上翅 [一部欠損] (i-46 [写真41]) ; 上翅 [部分] (i-55, 109)

分布：北海道～九州、対馬、韓国、中国、台湾

生息環境：低地から山のふもとにかけ、野原・畑・川原・松林などにすむ。

生態：夜行性で日中石の下などにかくれている。地表の小動物等を捕食する

ナミアオゴミムシ

Chlaenius (Chlaenius) pallipes (Gebler, 1823)

産出層準：腐食層

産出部位：左上翅 [基半] (i-91 [写真42])

分布：北海道～九州、隠岐、小豆島、極東ロシア、韓国、中国、シベリア、モンゴル

生息環境：平地～低山地の草地・畑・川原・里山・疎林にすむ。

生態：石下にひそみ、夜間地表を歩き回ってほかの虫などを食べる。

鞘翅目

ガムシ科

マメガムシ

Regimbartia attenuata (Fabricius, 1801)

産出層準：腐食層

産出部位：前胸背板 [全] (i-73 [写真43a])、上翅 [部分] (i-29左 [写真43b] ; i-79右)

分布：本州～九州、南西諸島、三宅島、八丈島、南大東島、

韓国、台湾、中国、ネパール、パキスタン、アフガニスタン、インド、スリランカ、アラビア、東洋区、豪州（北部）
生息環境：平地から丘陵地の止水域（田んぼ、ため池）に生息し、開放的な浅い湿地を好む。
生態：水中で水草や藻類を食べていると考えられる。

セマルガムシ

Coelostoma (Coelostoma) orbiculare (Fabricius, 1775)

産出層準：腐食層

産出部位：右上翅 [全] (i-98 [写真44])

同定について：ヒメセマルガムシと見た目はほぼ同じである。上翅の長さはヒメセマルガムシが2.7-2.9mm、セマルガムシが3.5-4.1mmであるのに対し、産出したものは長さが3.7mmであるので、後者と判断できた。

分布：北海道～九州、隠岐、極東ロシア、シベリア、欧州

生息環境：おもに平地の浅い湿地環境に生息し、植物が豊富な池沼、水田、河川など水際の泥底の環境を好む。各地に普通で個体数も多い。

生態：水中や水際で水草や藻類、腐植物質などを食べていると考えられる。遊泳は巧みでない。成虫は1年中水域で見られ、夏季には灯火にも飛来する。幼虫も成虫と同様の環境で夏季に見られる。

コガネムシ科

ナミマグソコガネ

Aphodius (Phaephodius) rectus Motschulsky, 1866

産出層準：腐食層

産出部位：左上翅 [全] (i-4 [写真45])、上翅 [全] (i-37右, i-5左, i-60左)。

分布：本州～九州、千島、サハリン、朝鮮半島、モンゴル、シベリア東部、中国

生息環境：平地～山地の草原、河原などの水辺、放牧地などに多い。

生態：牛・馬・シカ・サル・羊・山羊・タヌキ・イノシシ・カモシカ・人・犬・猫などの糞に集まる。また、堆肥や腐敗植物質にもみられる。

マルエンマコガネ

Onthophagus (Gibbonthophagus) viduus Harold, 1874

産出層準：腐食層・上層

産出部位：頭部 [全] (i-33 [写真46a], i-42)、前胸背板 [全] (i-54 [写真46b])、左上翅 [全] (i-107 [写真46c])

分布：北海道～九州、佐渡、伊豆諸島、対馬、後藤、南西諸島、濟州島、韓国、中国

生息環境：主に平地の河川敷から開放地・森林に生息する。
生態：新鮮な牛糞を好み、犬・人・水牛などの糞にも集まり、腐敗動物質にも来る。新鮮な糞を好む。

付記：関西では近年、急激に減少しており、奈良県大阪府では絶滅危惧Ⅱ類に、滋賀県では情報不足として、それぞれレッドリストに掲載されている。詳細は後述。

ヒメコガネ

Anomala rufocuprea Motschulsky, 1860

産出層準：腐食層・上層

産出部位：右後脛 (i-34 [写真47]; i-61)

分布：北海道～九州、南西諸島（奄美大島以北）、伊豆・小笠原、サハリン、朝鮮半島

生息環境：平地から低山地のオープンランドに多い。
生態：広食性でたくさんの種類の葉を食べる。特にクズを好む、

ヤマトアオドウガネ

Anomala viridana (Kolbe, 1886)

産出層準：腐食層

産出部位：右後脛 (i-95 [写真48]; i-10)

同定について：アオドウガネと比較をしたが、本種のほうが長い楕円形の点刻が密で多く、本種であると考えられた。

分布：本州、～九州、佐渡、隠岐、壱岐屋久島、濟州島、朝鮮半島。

生息環境：現在は分布が海岸に限定される。

付記：大阪府では絶滅危惧Ⅰ類、兵庫県では準絶滅危惧種に選定されている。詳細は後述。

コメツキムシ科

クロクシコメツキ

Melanotus (Melanotus) correctus correctus Candèze, 1865

産出層準：腐食層・上層

産出部位：前胸背板 (i - 50 [写真49a])、上翅 (i - 106 [写真49b]) ; i - 56, 94, 16, 108, 110)

分布：北海道～九州、佐渡、伊豆諸島、南西諸島 (屋久島、奄美大島)

生息環境：平地～山地の川原・里山・疎林に生息する。

生態：コメツキムシ類の生態は判明していないことが多い。幼虫は農作物を食害するものと捕食性のものがあるほか、成虫は体内から他の虫体の一部、花粉、木片、植物組織が見つかったことがある。

双翅目

ハエ類の一種

Gen. et sp. indet.

産出層準：腐食層

産出部位：囲蛹 (i - 14 [写真50]) ; i - 2, 45)

<特筆すべき種>

チャバネゴキブリについて

本種は永くアフリカ北東部が原産地とされ、Cornwell (1968) では以下のような分布拡大経緯が述べられている。何世紀も前にギリシャ人やフェニキア人の船に紛れ込んで、アフリカから地中海を渡って東ヨーロッパに入り、ヨーロッパを北へ西へとゆっくり拡がった。C. リンネはドイツで採集されたものに基づいて、本種を1767年に *Blattella germanica* として記載をした。英国に到達したのは19世紀半ばのクリミア戦争の時で、当時既にたくさん繁殖していたロシアから英国へ引き返した兵士のパンの籠に入っていたためとされる。その後、北米へ渡って多数繁殖し、北はアラスカにも分布している。豪州では1893年に最初の記録がある。

日本では屋外で多く見られる同属の自然分布種、モリチャバネゴキブリ *Blattella nipponica* Asahina, 1963と混同されていた。両種は前胸背板の模様で区別されるが、幸い今回はその部位が産出したので、チャバネゴキブリであると同定できる。他の近縁2種とともに図を示す (図4a - d)。チャバネゴキブリは完全な屋内性で、貿易に伴って江戸時代末期ごろに日本に入って来たという記述がある (朝比奈, 1991)。

しかし近年になって、チャバネゴキブリは実はアジア原産ではないかということが言われている。Tangら (2019)

は沖縄で最初に記載された野外種オキナワチャバネゴキブリ *Blattella asahinai* Mizukubo, 1981 (その後、スリランカ、ミャンマー、インド北部にも分布が判明) が系統解析でチャバネゴキブリに同じクラスター内に入ったこと、両種は互いに交配し、産まれた交雑個体は不稔ながらも成虫にまで発育することが出来ること、から、世界中の数あるチャバネゴキブリ *Blattella* 属の中で、オキナワチャバネゴキブリがチャバネゴキブリに最も近縁であると述べ、アジア起源説を強調している。ただし、チャバネゴキブリは欧米はもちろんアジアでもすべてが屋内性であり、野外でいっさい見つかったことがないこと、ヨーロッパで最も早くに繁殖が知られたロシアからプロイセンにかけての地域へのアジアからの交通路はなく、どのようにして入ったが不明なこと、などが課題であるという。

Obata (2022) は九州で発掘された縄文土器に残された圧痕から、クロゴキブリ *Periplaneta fuliginosa* (Serville, 1838) が当時からいたらしいことを示唆し、日本原産の可能性にも言及している。今回のチャバネゴキブリの発見によって、上述の欧米での分布拡大推定より遙か以前の弥生時代の日本に既にいたことが示された。本種もクロゴキブリ同様、日本原産の可能性を考えてもいいのかもしれない。

マルエンマコガネ

本種はかつて広く見られ、大阪市阿倍野区1955年、同・旭区1955年、箕尾1933年、京大構内1951年、奈良公園1942年、和歌山市中洲1985年などの標本記録があるが (高橋, 2015)、現在では近畿1府3県でレッドリストに掲載され、見かけることがほとんど無くなっている。本調査では上層で1匹、腐食層で少なくとも2匹 (頭部が2点産出) が記録されておりことから、弥生時代には普通に見られるものであった可能性がある。新鮮な糞を食べることや平地の草原・疎林環境を好む性質から、当時はそのような環境が広くあったということが示唆される。

ヤマトアオドウガネ

本種は現在では海岸近くに分布がほぼ限定されている。大阪市立自然史博物館の収蔵標本で2000年以降に採集されたのは京都府舞鶴市上安 (2000年) と大阪府阪南市貝掛海岸 (2020年) のみであった。他方、1930～40年代

では箕面、大阪府豊中市待兼山、京都府亀岡市など内陸部での標本記録もあり、近縁種のアオドウガネが増加することによって、生息地が狭められたと考えられる。今回の弥生時代の記録は、本種がかなりの内陸部である桜井市でもかつて分布していたことを示す証拠である。

<産出層準別の推定される自然環境>

腐食層：チャバネゴキブリが現代と同様の完全な屋内生活をしていたと仮定するなら、食材などを置いた生活感のある建物があったと考えられる。マメガムシが完全な水生甲虫であること、コヒメヒョウタンゴミムシ、ヨツモンコミズギワゴミムシ、キアシヌレチゴミムシ、セマルガムシ、ナミアオゴミムシが池や河川の縁など湿った地表にすむ不完全な水生甲虫であることから、水の貼られた田んぼや池のような止水、およびその周辺には濡れた地表が伴う環境が示唆される。オオオサムシ亜属の一種が見つかることから当地または近傍に森林環境の存在が想定できるが、その他は草原環境に見られるものが多いことから、疎林のようなものがごく一部にあったものの、止水域を伴うオープンランドが主体であったと考えられる。

上層：オオゴミムシ、マルエンマコガネ、ヒメコガネ、クロクシコメツキの4種が見つかる。上述の腐食層が水生甲虫や湿地性甲虫を多く含むのに対し、本層からは完全に陸生のものしか見つからない。マルエンマコガネは糞や腐敗動物質にも来る性質があり、何らかの人を含む動物との関わりが示唆され、それ以外の3種

は草原環境に見られるものばかりで、あること、時代が下がって乾燥化が進んだ可能性があること、を推定できる可能性があるものの、データが少ないため、前述の腐食層ほど積極的に当時の自然環境を述べることは困難である。

<化石標本の保管と再調査>

拾い上げられた昆虫の断片のうち、同定の可能性があるかと判断して同定を試みたのは110点で、そのうちの17種38点について報告した。残り72点は未同定のままになってしまったが、ゴミムシの一種の前胸背板(i-19 [写真51])、長さ4.9mmのたいへん大きな甲虫破片(i-12 [写真52])、分類群不明)が都合4点、分類群・部位不明の特徴ある甲虫破片i-44 [写真53]、分類群不明の特徴的斑紋ある上翅i-81 [写真54] など、種の同定まであと一歩というものも少なからずある。標本はすべて桜井市埋蔵文化財センターに保管されているので、いつの日か再調査によって新しい知見や誤同定の判明など、本調査地の当時の昆虫相の解明が進捗することを期待する。

V. おわりに

本稿をまとめるにあたり、石田惣、市川顕彦、小畑弘己、金原正明、金原美奈子、富永修、松本武（以上、敬称略）の皆様、産出種について詳しいご教示、文献の紹介などで大変お世話になりました。御礼申し上げます。

【植物遺存体 図版】



写真3



写真4-1



写真4-2



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真11



写真12



写真10



写真18



写真19



写真20



写真21



写真22



写真23



写真24



写真25



写真27



写真28



写真29



写真30



写真33



写真14



写真13



写真15



写真16



写真17



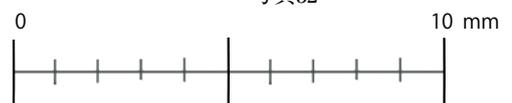
写真26



写真31



写真32



【昆虫化石 図版】



写真34 チャパネゴキブリ



写真35 コツチカメムシ



写真36 ヒメツチカメムシ



写真37 オオオサムシ亜属



写真38 コヒメヒョウタンゴミムシ



写真39 ヨツモンコミズギワゴミムシ



写真40 キアシヌレチゴミムシ



写真41 オオゴミムシ



写真42 ナミアオゴミムシ

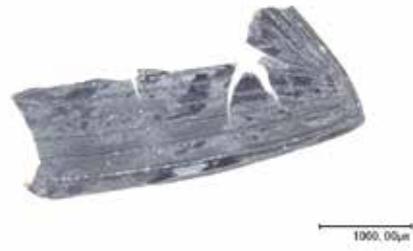


写真 43 a (左)、43 b (右) マメガムシ



写真 44 セマルガムシ

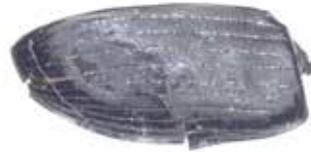


写真 45 ナミマグソコガネ

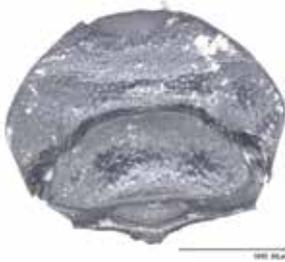


写真 46 a (左)、46 b (中)、46 c (右) マルエンマコガネ



写真 47 ヒメコガネ



写真 48 ヤマトアオドウガネ



写真 49 a (左)、49 b (中) クロクシコメツキ

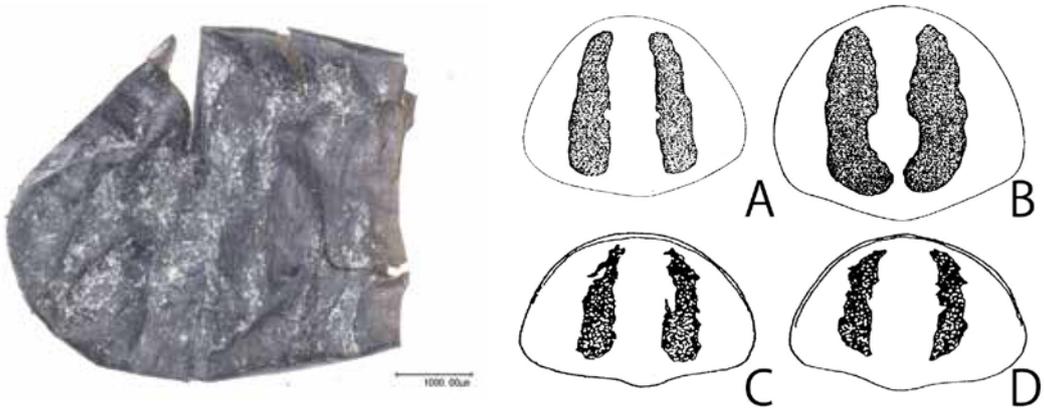


写真 50 ハエ類の一種

図 4 日本に産するチャバネゴキブリ属 4 種の違い (朝比奈, 1991)



写真 51 ゴミムシの一種の前胸背板



写真 52 分類群不明、おそらく前胸背板



写真 53 分類群・部位不明



写真 54 特徴的斑紋ある上翅、分類群不明

【植物遺存体 参考文献】

- 朝日新聞社編 1979 『朝日百科 世界の植物 3』 朝日新聞社 720pp.
- 長田武正 1993 (8刷) 『原色野草観察検索図鑑』 保育社 430pp.
- 金原正明 2013 「纏向遺跡の植物遺体群集の産状と植生、環境、生業の変遷と画期」 『纏向学研究センター研究紀要 纏向学研究』 第 1 号 43-62pp.
- 北村四郎・村田源・堀勝 1994 (改訂66刷) 『原色日本植物図鑑・草本編I』 保育社 89,99pp.
- 北村四郎・村田源 1994a (改訂59刷) 『原色日本植物図鑑・草本編II』 保育社 10,345pp.
- 北村四郎・村田源 1994b (改訂25刷) 『原色日本植物図鑑・木本編I』 保育社 197,283,36-37,307-308,322-323pp.
- 北村四郎・村田源 1994c (改訂16刷) 『原色日本植物図鑑・木本編II』 保育社 6-8,255-256pp.
- 西村知浩 2019 「桜井市纏向遺跡の発掘調査-太田微高地上の調査-」 『近畿弥生の会 第22回集会奈良場所 発表要旨集』 近畿弥生の会
- 堀田満・緒方健・新田あや・星川清親・柳宗民・山崎耕宇 1993 (初版第 3 刷) 『世界有用植物事典』 平凡社 198pp.
- 牧野富太郎 1996 『改訂版原色牧野植物大図鑑 合弁花・離弁花編』 北隆館 493pp.
- 牧野富太郎原著/邑田仁・米倉浩司編 2017 『新分類牧野日本植物図鑑』 北隆館 655pp.
- 三橋博監修 1998 (2 版) 『原色牧野和漢薬草大図鑑』 北隆館 457,592pp.

【昆虫化石 参考文献】

- 朝比奈正二郎 1991. 日本産ゴキブリ図鑑. 中山書店, 253pp.
- コガネムシ研究会 2005 『日本産コガネムシ上科図説 (第 1

- 巻)』 昆虫文献六本脚 189pp.
- 高橋敏 2012 「ゴミムシ類-Part C-」 『大阪市立自然史博物館 所蔵甲虫類目録 (2)』 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 44 集 57-170.
- 高橋敏・春澤圭太郎 2014 「コガネムシ上科:食糞群」 『大阪市立自然史博物館 所蔵甲虫類目録 (3)』 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 46 集 47-100.
- 中根猛彦 1987 『学研生物図鑑-特徴がすぐわかる 昆虫 2 甲虫』 学研 445pp.
- 林長閑監修1991 『決定版 生物大図鑑 昆虫 II 甲虫』 世界文化社399pp.
- 安永智秀・山下泉・川沢哲夫・高井幹夫・川村満著 1991 『日本原色カメムシ図鑑』 全国農村教育協会 380pp.
- 中島淳・林成多・石田和男・北野忠・吉富博之 2020 『ネイチャーガイド 日本の水生昆虫』 文一総合出版 352pp.
- 安井通宏 2012 「ゴミムシ類-Part B-」 『大阪市立自然史博物館 所蔵甲虫類目録 (2)』 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 44 集 37-56.
- 安井通宏・初宿成彦 2012 「ゴミムシ類-Part A-」 『大阪市立自然史博物館 所蔵甲虫類目録 (2)』 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 44 集 6-36.
- 安永智秀・中谷至伸・高井幹夫 2001 『日本原色カメムシ図鑑 (第 2 巻) 陸生カメムシ類』 全国農村教育協会 350pp.
- Obata H. 2022. Obata H, Sano T, Nishizono K 2022. The Jomon people cohabitated with cockroaches—The prehistoric pottery impressions reveal the existence of sanitary pests Journal of Archaeological Science: Reports: vol.45: 1-12.
- Qian Tang, Thomas Bourguignon, Luc Willenmse, Eliane De Coninck &Theodore Evans 2019. Global spread of the German cockroach, *Blattella germanica*. Biological Invasions 21: 693-707.

ミロク谷石棺を対象とした三次元計測

村 上 朋
青 木 智 史
金 原 正 明

目 次

I. はじめに	113
II. ミロク谷石棺の概要	113
III. 調査概要	115
IV. 三次元計測の成果	116
V. まとめ	119

論文要旨

ミロク谷石棺は赤色の阿蘇溶結凝灰岩製の石棺であり、金屋の石仏が安置されている高床式の収蔵庫の床下に2つに割れた状態で置かれている。この石棺2点に対し、2022年9月に奈良教育大学の調査により三次元計測を実施した。2つのデータをコンピュータ上で接合することにより、石棺の大きさについての正確な計測値を得た。また、加工痕などの表面形状を詳細に観察することが容易になった。その結果、三次元データを基にした正確な実測図の作成し、さらに石棺制作以降の加工痕が確認されたことから転用された可能性を有することが明らかとなった。この転用をめぐる、金屋の石仏や収蔵庫西側に置かれている黒色の石材との関連性について検討を重ねることを今後の展望としている。

村上 朋（むらかみ とも）

奈良教育大学大学院教育学研究科
修士課程大学院生

青木 智史（あおき さとし）

奈良教育大学教育学部理科教育講座
（文化財科学）

金原 正明（かねはら まさあき）

奈良教育大学 ESD・SDGs センター研究部員
桜井市纏向学研究センター共同研究員

ミロク谷石棺を対象とした三次元計測

村上 朋・青木智史・金原 正明

I. はじめに

近年、考古学・埋蔵文化財の調査研究において、三次元計測が急速に普及しつつある。考古学は遺構測量や遺物実測を通して、過去の人々が残した物的証拠の立体情報を捉えることが基本であるが、そこにさらなる技術として三次元計測が加わった。今までの記録方法としては、拓本や写真などの二次元的な方法やマコなどの考古学特有の実測における三次元的な方法などがあったが、高精度の三次元的な記録が可能となった。そして、さらなる技術の進歩により計測機器の低価格化と小型化や、パソコンの高機能化進み、特化した計測機器などを必要とせずとも三次元情報の取得が可能となっている。特にTOF (Time Of Flight) などのレーザー光を用いた距離測定の仕事の汎用化やLiDAR (Light Detection And Ranging) スキャナーがスマートフォンなどの小型端末に搭載されるようになったことで、小型端末を用いた三次元計測が可能となった。また、SfM-MVS (Structure from Motion and Multi-view Stereo) という画像から三次元モデルを再構成する写真計測技術が活用されるようになってきている。しかし、様々な技術が増えたことや誰でも測定が可能になったことにより、三次元データの活用をめぐる知的財産権や著作権などの権利やデータの保存方法などの学問領域の課題が表出している。

II. ミロク谷石棺の概要

桜井市に位置する金屋の集落から大神神社へと続く山の辺の道沿いにある公益財団法人喜多美術館の近くの取蔵庫には、国の重要文化財である「金屋の石仏」と呼ばれる石仏2体が収められている。この高床式になっている取蔵庫の床下にミロク谷石棺が2つに割れた状態で置



図1 取蔵庫の下に安置されているミロク谷石棺

かれています。

石棺とは石製の棺のことである。古墳に用いられる棺は用いる材の種類によって木棺、石棺、陶棺、甕棺、夾紵棺に分けられる。石棺は古墳時代前期後半から用いられ始め、終末期古墳まで利用されている。畿内とその周辺では長持形石棺や家形石棺、一部の地域首長に割竹形石棺、舟形石棺が採用されている。ミロク谷石棺は石棺の蓋であり身の所在は不明であり、埋置されていた古墳も明らかではない。蓋の内面には印籠合わせの彫り込みがみられる。石棺の形式は必ずしも刳抜式をなすかどうかは明らかではなく、組合式である可能性が残る。

この石棺において注目すべきは石材である。ミロク谷石棺には赤色の石材が用いられており、先行研究において熊本県宇土半島で産出する阿蘇溶結凝灰岩 (Aso-4 溶結凝灰岩) であると指摘されている (高木・渡辺 1990a)。まず、凝灰岩とは、火山から噴出された火山灰砕屑物が地上や水中に堆積してできた岩石のことである。これに対し、溶結凝灰岩とは、火山の噴火によって空中に放出された噴出物が地上に降下した後に、噴出物自身が持つ熱と重量によってその一部が溶融し圧縮されてきた凝灰岩の一種のことである。ミロク谷石棺の石材で

ある Aso-4 溶結凝灰岩とは溶結凝灰岩のうち、阿蘇山の4回の巨大噴火のうち4回目の噴火（約9万年前）で産出した火砕流堆積物のことであり、中九州一帯から遠くは周防灘をこえて山口県宇部まで広く分布している。阿蘇溶結凝灰岩は阿蘇石や灰石と呼ばれ、一般的に灰黒色が多いが、まれにピンク色から赤色に発色するものがある。このような赤色の阿蘇溶結凝灰岩は馬門地方で産出することから馬門石、馬門ピンク石、阿蘇ピンク石などと呼ばれている。なお、本稿では赤色の阿蘇溶結凝灰岩と呼ぶこととする。石材の色に関わらずこの種の石材による石棺は、中国・四国地方の瀬戸内海沿岸部から近畿地方に至る範囲に分布している。このうち赤色の石材を用いたと推定される石棺や石造物の例は、以下の表1の16例（ミロク谷石棺を含む）である。ただし、造山古墳前方部石棺に関しては石材の色が灰色であるという指摘もあり、議論が残る。これらの石棺石材はおよそ5世紀末から7世紀前半にかけた限定的な時期のみに使用さ

れている。この赤色の石材が用いられた石棺をめぐるのは、縄掛突起の付加位置や縄掛突起形状など複数の観点から総合的に考察し、長持山古墳2号石棺、野神古墳、東乗鞍古墳、円山古墳、甲山古墳、植山古墳の順で編年し、野神古墳と東乗鞍古墳の間に兜塚古墳とミロク谷石棺が納まるという指摘がある（太田2004）。また、継体天皇陵の可能性のある今城塚古墳からもこの石材の石棺の破片が確認されたことから、5世紀後半から6世紀前半の大王墓や有力豪族層の棺に使用されている可能性が指摘されている（高木2003）。さらに、この石材を用いた石棺は九州では1例も確認できないことから、畿内の中央勢力が独占的に使用していたと推察され、古墳時代に畿内と九州に何らかの関係があったと示唆される。このように、石棺石材の原産地について明らかにすることで古墳時代の勢力関係を勘案する一つの材料になっている。

同じく金屋の石仏を納める収蔵庫の下（西側）には、黒色の石材が置かれており、方形に刳り抜いた加工などが残されていることから、何らかに用いられていたものである可能性があるが、用途は不明である。

また、ミロク谷石棺についての歴史的な事象の記載が確認できるものは次の通りである。

この二面の伝来についてはつまびらかではないが、もとの石棺と大きさの合う同質の蓋が同じ場所に残っており、古くからこの付近に伝えられていたものと推定される。（桜井市史編纂委員会1979 p.823）

金屋の「みろく谷」と呼ばれる山の辺道から東へ少しはいったところ、辻堂のような同の中に「金屋石仏」がある。もとここに石龕があった。奈良十輪院の石龕の体積にして十倍はあろうと推定される。これが明治初年に破却され、その中の二体の壁体仏が破壊を免れ、捨て置かれていたのが実状である。（清水俊明1984 p.902）

石龕とは仏像を納める石造の厨子のことである。上記の奈良県史の記載の通り、この地に石龕があったと仮定すると、これら石仏や石棺、石材には石龕の構成材であったという共通点を持つ可能性があると言える。また、ミロク谷石棺は前述した通り、出土地が不明であるとともに身の形態や所在についても明らかでない。このため、

	古墳名	所在地	墳形	内部主体
1	造山古墳前方部石棺	岡山県岡山市北区新庄	前方後円墳	不明
2	築山古墳	岡山県瀬戸内市長船町西須恵	前方後円墳	竪穴式石槨
3	長持山古墳2号石棺	大阪府藤井寺市沢田三丁目	円墳	
4	峯ヶ塚古墳	大阪府羽曳野市軽里二丁目	前方後円墳	竪穴式石槨
5	今城塚古墳	大阪府高槻市郡家新町	前方後円墳	不明
6	四天王寺礼拝石	大阪府大阪市天王寺区	不明	不明
7	野神古墳	奈良県奈良市南京終二丁目		竪穴式石槨
8	別所鐘子塚古墳	奈良県天理市別所	前方後円墳	竪穴式石槨
9	東乗鞍古墳	奈良県天理市乙木町	前方後円墳	横穴式石室
10	慶運寺石棺	奈良県桜井市大字箸中	不明	
11	ミロク谷石棺	奈良県桜井市金屋	不明	不明
12	兜塚古墳	奈良県桜井市浅古	前方後円墳	竪穴式石槨
13	植山古墳東石棺	奈良県橿原市五条野町	方墳	横穴式石室
14	植山古墳西石棺	奈良県橿原市五条野町	方墳	横穴式石室
15	円山古墳	滋賀県野洲町小篠原	円墳	横穴式石室
16	甲山古墳	滋賀県野洲町小篠原	円墳	横穴式石室

表1 赤色の阿蘇溶結凝灰岩を用いたと推定される石棺や石造物（宇土市史編纂委員会2003参照）

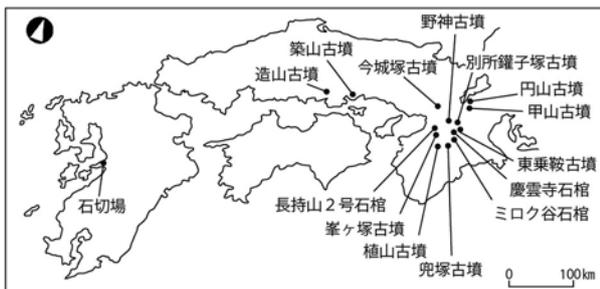


図2 赤色の阿蘇溶結凝灰岩を用いたと推定される石棺や石造物の分布（高木2006より一部改変）

重要な情報が欠落しており石棺研究での位置付けが難しく取り上げられることが今まであまりなかった。また、金屋の石仏とミロク谷石棺、黒色の石材の関連性についても明らかになっていない。

Ⅲ. 調査概要

1. 調査に至る経緯

ミロク谷石棺は前述したように、石棺研究史の中で取り上げられることが少なく、研究の基礎資料となる正確な実測図は作成されてこなかった。現在確認できる実測図は簡易的なものに限定されており、図面の精度に問題があると考えられる。このような状況から、今後の調査・研究や石棺の保存に向けての基礎的な資料とするため、三次元計測による調査を実施した。また、ミロク谷石棺は2つに割れていることから、石棺制作当初の全体像の把握が難しいという課題がある。そこで、三次元計測を行うことによって、コンピュータ上で2つのデータを接合し全体像の把握や実測図を作成することを目的とした。

調査期間は2022年9月5日～9日、12日、13日の計7日間で奈良教育大学が実施した。計測対象は2点である。大きいものをミロク谷石棺1、小さいものをミロク谷石棺2とする。今回の計測の目的は三次元データでの記録・保存と石棺全体像の把握であるため、石棺全体の三次元情報の取得が必要不可欠である。しかし、石棺が置かれている収蔵庫の下で計測を行うことは困難である。このため、桜井市教育委員会事務局文化財課に協力いただき、合板やハンドウインチを用いて石棺を収蔵庫の下から引き出し、上下をひっくり返すなど適宜工夫しながら全体の計測を行った。また、奥田尚氏に調査に同行していただき、石棺石材についての知見を得ることができた。

2. 三次元計測の概要

石棺を対象とした三次元計測の近年注目されている例としては、岡山県造山古墳前方部所在石棺（新納2012）と大阪府藤井寺市唐櫃山古墳石棺（廣瀬2018）を対象とした2例が挙げられる。それぞれ造山古墳石棺はレーザー光を利用した光切断方式、唐櫃山古墳石棺はSfM-MVSという複数の写真から三次元モデルを構築する手法を用いている。



図3 三次元計測の様子

今回の計測では、Artec Eva 3D スキャナー（Artec社製）を用いた。このスキャナーは、能動型ステレオという光を照射すると投影部と対象を観測するカメラなどの受光部からなる。光源は格子状のパターンを投光するストラクチャライト方式と呼ばれる方法である。物体に投影した格子状のパターンは物体の表面に当たると、物体の形状に変形する。この現象が起こる間にカメラがパターンのゆがみを捉え、このゆがみ方によって物体の形や奥行きを求めることができる。したがって、前述の2例と異なる三次元計測原理を用いている。像は多数の点の集合（点群）として計測される。これと同時に、対象のテクスチャ情報（表面の画像データ）も取得する。そして、計測後のデータの解析には三次元データ編集ソフト

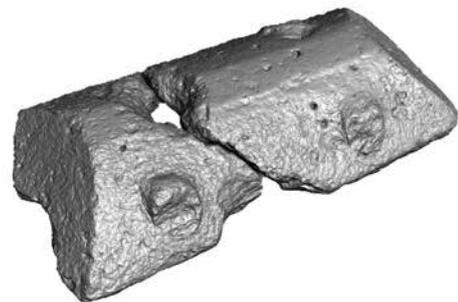


図4 ミロク谷石棺鳥瞰図

トウェアである「Artec Studio 11」(Artec社製)を用いた。不要部を削除した後、数十回のスキャンによって得られたデータを統合し、メッシュ化という作業を行う。メッシュ化とは計測された三次位置座標を持つ点と点を線で結び、三角形を一面とする多面体(ポリゴン)に変換し、立体データとして記録することである。その後、スモールオブジェクトフィルターでデータの容量を軽くし、最後にテクスチャマッピングにより表面の色情報を追加する。今回は、表面の形状の把握を目的とするためにテクスチャマッピングを行わなかった。

IV. 三次元計測の成果

表面の形状を詳細に観察するために三次元画像を取得した。また、今後の考古学研究において基礎的資料となる三次元計測図および実測図(図5、図6)を作成した。以下、三次元計測の成果を述べる。

1. ミロク谷石棺の大きさ

完成した石棺1と石棺2のデータをコンピュータ上で接合を試みたところ、大きな欠損もなく接合することができた(図4)。このため、ミロク谷石棺全体の長さを計測した。なお、本章では石棺1と石棺2の2つを繋げたものをミロク谷石棺と呼ぶこととする。ミロク谷石棺の大きさは、棺蓋長約195cm、棺蓋幅約100cm、棺蓋高約39cmであることが明らかとなった(詳細なデータは表2参照)。解析後の三次元データの点数は、石棺1は約2,460万点、石棺2は約1,620万点であった。

長さの計測には、フリーソフトである「3D builder」(Microsoft社)を用いた。棺蓋長、棺蓋幅、棺蓋高、頂部平坦面の最大値を計測した。計測は5回行い、平均値と標準誤差を求め、表2にまとめた。棺蓋長、棺蓋幅、棺蓋高については、石棺1の左側面の左辺と石棺2の右側面の右辺が石棺作成当時の状況を残している辺である

と判断した(図5、図6)。そして、内部にちょうど石棺が納まるような直方体を仮定し、この辺を棺蓋長とし、これにより棺蓋幅と棺蓋高の方向を決定した。石棺1と石棺2を破断面で繋げたミロク谷石棺は、石棺1の上面をミロク谷石棺の上面として定義した。

ミロク谷石棺と制作時期が近いとされる同じ赤色の阿蘇溶結凝灰岩製石棺である兜塚古墳石棺の大きさは棺蓋長約199cm、棺蓋幅119cm、棺蓋高42cm(石橋2013)であり、今回の計測結果によって得られたミロク谷石棺と長さおよび高さにおいては類似していると言える。また幅に関しては約10cmの違いが見られ、この数値の差が石棺の形状や編年など歴史的観点への影響については今後検討する必要がある。

2. 全体像の把握

接合部の様子から、石棺中央に穴が開いていることが明らかとなった(図7-a面)。この穴は意図的に開けられたものであり、これにより石棺2の縄掛突起の片方(図7-d面)がかなり損傷していると推察される。古墳に埋置されている石棺は盗掘を受けていることがあり、この際にできる盗掘穴である可能性が考えられるが、石棺の転用後に加工された可能性も考え得る。また、この穴を開けた際に石棺が割れたかは定かでない。穴やその周辺は表面の凹凸が激しいが、破断面は比較的滑らかで周辺の加工痕も明瞭である。このように、穴と破断面において表面形状の劣化に差があることから、穴を開けたときに割れたのではなく時間をおいて2つに割れた可能性も考えられる。したがって、ミロク谷石棺の転用材として使用については今後丁寧に検討していく必要がある。また、図7のc面の右長辺には一部欠損が見られるが、石棺全体として見ると棺蓋幅は厳密に長方形ではなく、石棺2にかけてやや幅が広がる台形を呈していることが分かる。また、棺蓋高に関しても石棺2にかけてやや高くなり台形を呈している。

	棺蓋長 (mm)	棺蓋幅 (mm)	棺蓋高 (mm)	頂部平坦面 (mm)
ミロク谷石棺1	1282.3±0.5	988.5±0.3	382.4±0.1	199.6±0.7
ミロク谷石棺2	919.0±0.4	978.3±0.3	389.4±0.1	191.1±0.3
ミロク谷石棺	1947.0±0.5	997.8±0.3	392.0±0.4	195.1±1.0

表2 ミロク谷石棺の大きさ

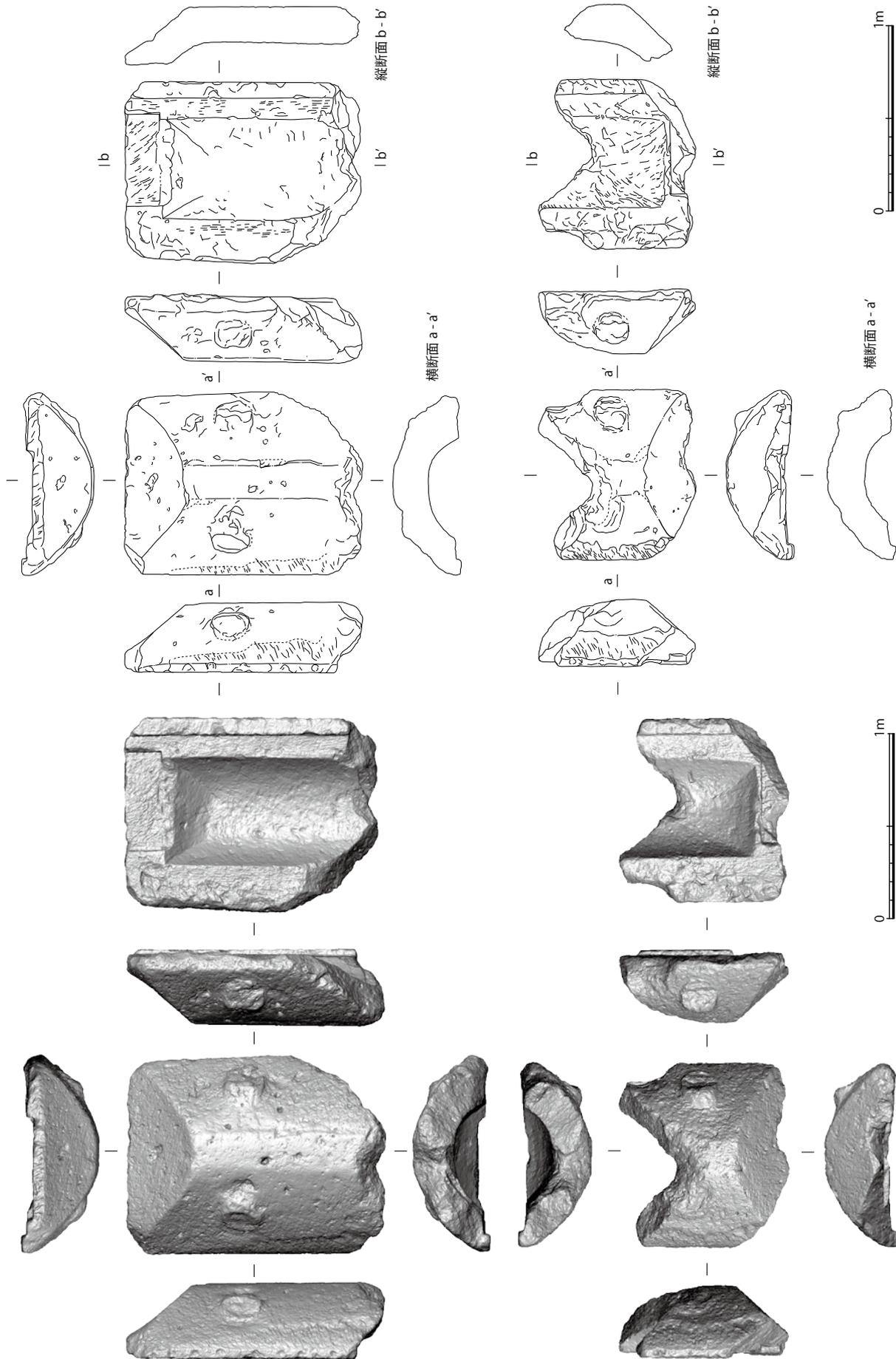


図6 ミロク谷石棺1 (上図) とミロク谷石棺2 (下図) の実測図 (1/30)

図5 ミロク谷石棺1 (上図) とミロク谷石棺2 (下図) の三次元計測図 (1/30)

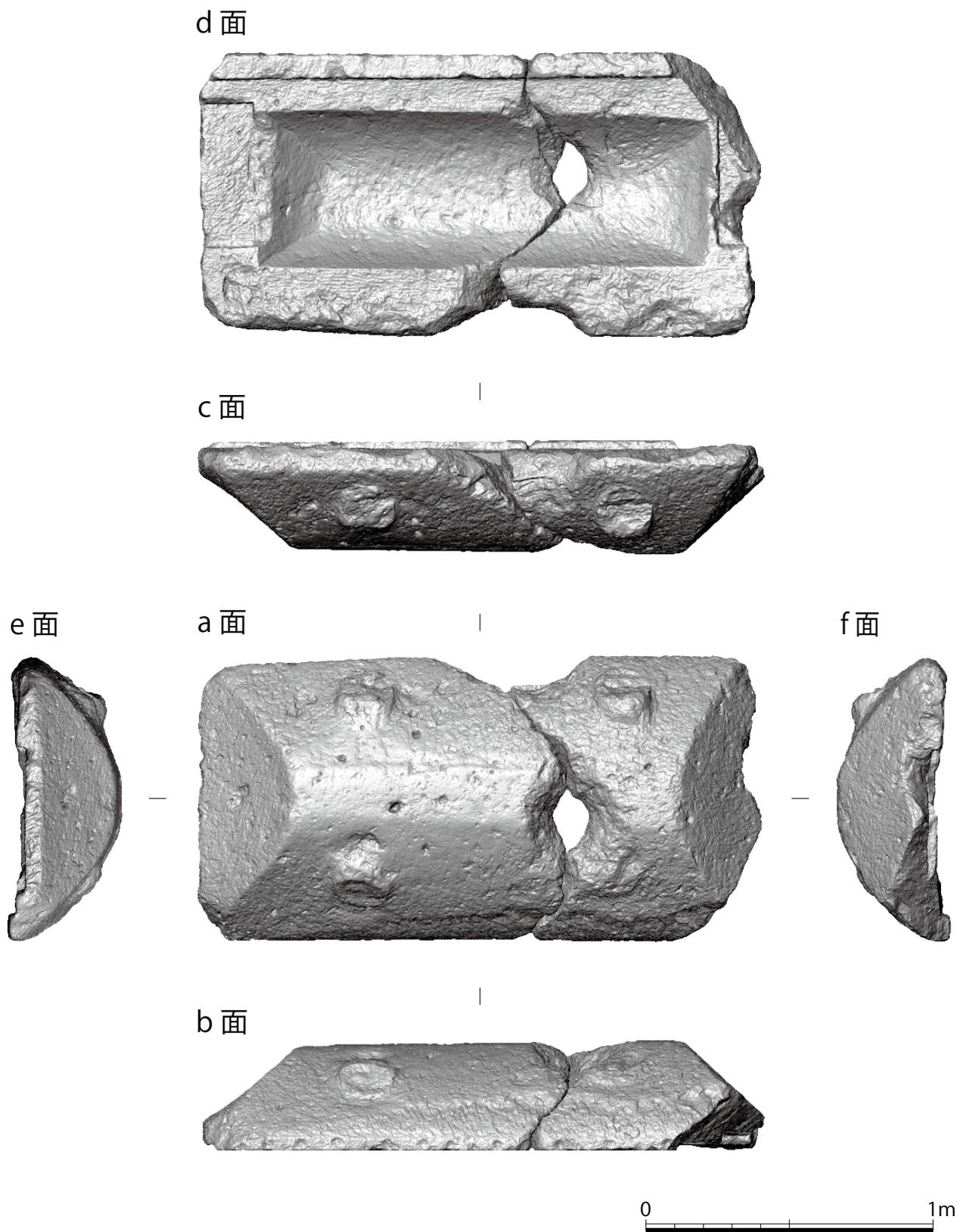


図7 ミロク谷石棺接合復元案 (1/20)

3. 加工痕

ミロク谷石棺全体に土工工具による加工痕が確認できる。特に石棺内側（図7のd面）の加工痕は風化などの劣化の影響を受けにくいことから明瞭に残っている。この石棺内面には印籠合わせの掘り込みがみられるが、d面における右長辺については確認できるが、左長辺には見いだせない。これは石棺制作以後転用された際に、意図的には加工されたと推測される。また同じくd面上の辺と下辺には縦約17cm、横約50cm、深さ約3～4cmの方形に掘り込みが確認できる。これも転用された際の加工と推察される。

石棺外面においては、図7のb面にゆるやかな波線を描く稜線が確認でき、この稜線より下部はわずかにはつり取られた、はぎとられている痕跡が見受けられる。ここに長さ約4～6cmの直線的な加工痕が連続する。また、このように削り取る加工痕は片側にしか確認できない。石棺1と石棺2に連続して見られることから割れる前の加工痕であることが分かる。さらに、左長辺（b面）の垂直面のみには一定の間隔で盃状のくぼみが確認できる。くぼみの大きさは、直径約3～4cm、深さ約1～2cmであり、明瞭に確認できるくぼみは10個認められる。石棺1と石棺2ともに確認されることから石棺作成当時の加工痕ではなく、石棺が2つに割れる前に施された加工であると推察される。このようなくぼみは盃状穴と呼ばれている。『神田山石棺（1981）』の報告によると、山口市盆地周辺において盃状穴板石は20例以上確認されており、盃状穴が施された石棺の例として神田山古墳群から出土している箱式石棺の蓋石がある。第1号箱式石棺には蓋石の上面に直径2～3cm、深さ0.5cm～1.5cmの盃状の穴が計21個ほぼ3列に並んで刻まれている。国分直一は盃状穴を性シンボルの象徴であり死者の蘇生を意味する刻印と考え、朝鮮半島系の習俗の影響を指摘している。

4. 周辺石材との関連性

金屋の石仏は、凝灰岩製の石材が使用されており、石仏下部の中央には突起があることが収蔵庫安置の際に撮影された写真から確認されている。また、石材の端にも突起があることや背面は緩やかな弧を描くことから、石棺石材あるいは竪穴式石室の天井石の転用である可能性を有すると推察される。石棺石材の転用である可能性に

ついてはすでに奈良県史において指摘されている（清水俊明1984）。ミロク谷石棺と金屋の石仏や今回未調査の黒色の石材には、先述したように石龕の構成材であったという共通点を持つ可能性を有する。これらの関連性については、ミロク谷石棺に認められる転用された際の加工を基に検討を進め、今後の課題としたい。

V. まとめ

以上から、石棺を対象とした三次元計測には有効性があることは言を俟たない。さらには、取得した三次元情報の考古学研究における活用に関しても一定の成果を上げることができた。しかし、今回は屋外にあり移動が比較的可能であるという条件の石棺の一つ調査・研究したに過ぎず、石棺を対象とした三次元計測の有効性を完全に示すことができたわけではない。すなわち、三次元計測における調査環境や石棺表面の状況など課題は多岐にわたる。したがって、石棺を対象とした三次元計測の課題についての検討は今回で結論付けるのではなく、今後のさらなる研究を待ちたい。

謝辞

今回の調査に際して、ミロク谷石棺の調査を快諾していただき、ご協力いただいた桜井市教育委員会事務局文化財課の方々には厚く御礼申し上げます。また、調査に同行し研究に対してご助言をいただいた奥田尚氏、中岡敬善氏、そして調査にご協力いただいた奈良教育大学教育学部文化遺産教育専修の学生の方々に、この場を借りて心から感謝申し上げます。

【参考文献】

- 石橋宏 2013『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房
- 白杵勲・正司哲朗 2013「考古資料のデジタル記録化とデータ活用」『札幌学院大学人文学会紀要』第93号 pp.83-104 札幌学院大学総合研究所
- 宇土市史編纂委員会編 2003『新宇土市史 通史編第1巻：自然・古代』宇土市
- 太田宏明 2004「畿内系家形石棺の変遷と系統の統合」『古代文化』第56巻 第12号 pp.659-678 古代学協会
- 奥田尚 2002『石の考古学』学生社
- 奥田尚 2018「畿内における竪穴式石槨の石材・石棺材の変遷」『橿原考古学研究所論集』第17集 pp.23-29 奈良県立橿原考古学研究所編 八木書店
- 金田明大ほか 2010『文化財のための三次元計測』岩田書院
- 熊本県立装飾古墳館編 2006「阿蘇の灰石展解説図録熊本県立装飾古墳館平成18年度前期企画展」『全国の装飾古墳』第7号 熊本県立装飾古墳館
- 桜井市史編纂委員会編 1979『桜井市史 上巻』桜井市
- 清水俊明編 1984『奈良県史 石造美術』奈良県史編集委員会編集 第7巻 名著出版
- 高木恭二 1994「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』第46巻 5号 pp.25-47 古代学協会京都支部
- 高木恭二 2002「熊本の古墳からみた船山古墳」『東アジアと江田船山古墳』白石太郎監修／玉名歴史研究会編 雄山閣
- 高木恭二 2006『大王のひつぎ海をゆく－謎に挑んだ古代船』読売新聞西部本社・大王のひつぎ実験航海実行委員会編 海鳥社
- 高木恭二・藤本貴仁 2007「文化財レポート 畿内に運ばれた九州産の石棺－石棺製作地と石棺製作・運搬実験－」『日本歴史』第705号 pp.94-102 日本歴史学会編 吉川弘文館
- 高木恭二・渡辺一徳 1990「石棺研究への一提言－阿蘇石の五人とピンク石石棺の系譜－」『古代文化』第42巻 第1号 pp.21-32 古代学協会
- 高木恭二・渡辺一徳 1990「二上山ピンク石製石棺への疑問－九州系舟形石棺から畿内系家形石棺への推移」『九州上代文化論集 乙益重隆先生古希記念論文集』 pp.239-270 乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
- 奈良県橿原市教育委員会事務局編 2014「史跡 植山古墳」『橿原市埋蔵文化財調査報告』第9号 橿原市教育委員会
- 新納泉 2012「造山古墳前方部所在石棺の三次元計測」『岡山市造山古墳群の調査概報』 pp.33-37 新納泉
- 野口淳 2020「三次元データの可能性－研究と課題」『奈良文化財研究所報告』第24冊 pp.59-70 国立文化財機構奈良文化財研究所
- 羽曳野市教育委員会編 2002「史跡古市古墳群峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書」『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第48巻』羽曳野市教育委員会生涯教育部文化財保護課
- 廣瀬寛ほか 2018「藤井寺市唐櫃山古墳石棺の三次元計測」『奈良文化財研究所紀要』 p.70-71 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 文化庁文化財第2課埋蔵文化財部門編 2020「デジタルデータによる図面等記録類の取り扱いについて」『奈良文化財研究所報告』第24冊 pp.41-46 文化庁
- 間壁忠彦 1994『石棺から古墳時代を考える－型と材質で表す勢力分布』同朋舎出版
- 間壁忠彦 2007「阿蘇石」『季刊考古学－特集石の考古学：石材の原産地と分布』第99号 pp.30-33 雄山閣
- 山口市教育委員会 1981『神田山石棺－山口市埋蔵文化財調査報告第12集』山口市教育委員会
- 和田晴吾 1976「＜論説＞畿内の家形石棺」『史林』第59巻 第3号 史学研究会
- 和田晴吾 1991「8 石工技術」『古墳時代の研究5 生産と流通 II』雄山閣
- 渡辺一徳 1989「石材としての阿蘇溶結凝灰岩」熊本地学会誌』第8号 pp.6-12 熊本地学会

編集後記

○ ようやく当研究センターの研究紀要である『纏向学研究』第12号をお届けすることができました。今号は5本の論考を掲載しました。研究論文では、外部研究者の方2名と、共同研究員1名の方が、調査や分析報告では、共同研究員や外部研究者のほか大学院生を含む学生たちの名も連ねています。多くの皆さまのご協力により、「纏向学」をより深める内容に仕上がりました。ご寄稿いただきました皆さま、本当にありがとうございました。

○ 前半3本の論考は、いずれも壮大なテーマです。既存の学説や常識にとらわれず、新たな歴史観や仮説を提示する意欲作です。皆様の反応が楽しみです。ちなみに第11号と今号に掲載した水林論文2篇に対する寺沢所長の答論は、次号に用意される予定です。

後半の2本は、発掘調査分析や調査報告です。土壌分析をおこなうことにより纏向遺跡の土坑の微細な内容物を明らかにでき大きな成果が得られましたし、ミクロ谷の石棺を最新の方法で測量することによって通常ではわからない微細な形状まで明らかにされました。発掘調査だけではみることのできない世界を知ることができました。改めて、学際的な分析の重要性を認識した次第です。

○丹羽は本号から初めて編集担当です。わからないことだらけで、所長や所員の助けを得て、かろうじて刊行することができました。執筆者をはじめとして、周りの方々には多くのご迷惑をおかけしました。改めてお詫びと感謝を申し上げます。次号は、執筆者としてもさらに『纏向学研究』に貢献できるよう、研鑽を積んでいかなければならないと強く感じました。今後も「纏向学」の発信源として、さらなる内容の充実を目指したいと思いますので、引き続きご意見・ご協力くださいますようお願い申し上げます。
(丹羽恵二)

○ 最近の「学界動向」や古代史・考古学の「論文」を見ると、『纏向学研究』に掲載された論文や報告などが引用されているのをたびたび見かけるようになりました。センターの研究紀要として毎年刊行を続けてきた私たちとしては大変光栄でうれしい限りです。改めて、玉稿を戴いた先生方には心から感謝申し上げます。

○ こうした研究誌を定期的に続けていくことの大変さは斯界の状況を見ても明らかです。印刷費の高騰や研究者層の薄減も確かな原因ですが、研究分野の細分化と方法論の偏向化によって幅広い執筆陣や読者層が確保できないという斯界の憂うべき傾向も大きく反映されているように思えます。そうした反省に立って、ますます学際的な歴史学研究を目指すべく努力していかねばと肝に命じるこの頃です。一層の叱咤と応援をいただければ幸いです。
(寺沢薫)

纏向学研究センター研究紀要

纏向学研究 第12号

令和6年3月29日 発行

発行 桜井市纏向学研究センター

奈良県桜井市三輪686番地 芝運動公園内

印刷 株式会社明新社

奈良市南京終町3丁目464番地



Proceedings of the
Research Center for Makimukugaku, Sakurai City.
STUDIES IN MAKIMUKUGAKU 2024
NO.12